

れども亞米利加人が往來を歩いた靴の儘で颯々と上るから此方も麻裏草履で其上に上たと突然酒が出る徳利の口を明けると恐ろしい音がして先づ變な事だと思ふたのはシャンパンだ其コップの中に何か浮て居るのも分らない三四月暖氣の時節に氷があらうとは思ひも寄らぬ話でズーッと銘々の前にコップが並んで其酒を飲む時の有様を申せば列座の日本人中で先づコップに浮いて居るものを口の中に入れて膽を潰して吹出す者もあれば口から出さずにガリ／＼噛む者もあると云ふやうな譯けで漸く氷が這入て居ると云ふことが分つたソコで又煙草を一服と思つた所で煙草盆がない灰吹がないから其とき私はストーヴの火で一寸と點けたマツチも出て居たらうけれどもマツチも何も知りませぬからストーヴで吸付けた所がどうも灰吹がないので吸殻を棄る所がない夫れから懐中の紙を出して其紙の中に吸殻を

吹出して念を入れて揉で／＼火の氣のないやうに振付けて袂に入れて暫くして又後の一服を遣らうとする其時に袂から煙が出て居る何ぞ圖らん能く消したと思つた其吸殻の火が紙に移つて煙が出て来たには大に膽を潰した都てこんな事ばかりで私は生れてから嫁入をしたこととはないが花嫁が勝手の分らぬ家に住込んで見ず知らずの人に取巻かれてチャホヤ云はれて笑ふ者もあれば冗談を云ふ者もある其中でお嫁さんばかり獨り静にしてお行儀を繕ひ人に笑はれぬやうにしようとして却てマゴツイで顔を赤くする其苦しさはこんなものであらうと凡そ推察が出来ました日本を出るまでは天下獨歩眼中人なし怖い者なしと威張て居た磊落書生も始めて亞米利加に来て花嫁のやうに小さくなつて仕舞たのは自分でも可笑しかつた夫れから彼方の貴女紳士が打寄りダンシングとか云て踊りをして見せると云ふのは毎

度の事で扱行て見た處が少しも分らず妙な風をして男女が座敷中を飛廻る其様子はどうにも斯うにも唯可笑くて堪らないけれども笑ては悪いと思ふから成るだけ我慢して笑はないやうにして見て居たが是れも初めの中は随分苦勞であつた一寸した事でも右の通りの始末で社會上の習慣風俗は少しも分らない或る時にメーリアイランドの近處にバレーフォートと云ふ處があつて其處に和蘭の醫者が居る和蘭人は如何しても日本人と縁が近いので其醫者が艦長の木村さんを招待したいから來て呉れないかと云ふので其醫者の家に行つた所が田舎相應の流行家と見えて中々の御馳走が出る中に如何にも不審な事にはお内儀さんが出て來て座敷に坐り込んで頻りに客の取持をする御亭主が周旋奔走して居る是れは可笑しい丸で日本とアベコベな事をして居る御亭主が客の相手になつてお

内儀さんが周旋奔走するのが當然であるに左りとはどうも可笑しいソコで御馳走は何かと云ふと豚の子の丸煮が出た是れにも膽を潰した如何だマア呆返た丸で安達ヶ原に行つたやうな譯けだと斯う思ふた散々馳走を受けて其歸りに馬に乗らないかと云ふソレは面白い久振りだから乗らうと云て其馬を借りて乘て來た艦長木村は江戸の旗本だから馬に乗ることは上手だ江戸に居れば毎日馬に乗らぬことはない夫れから其馬に乗てどん／＼驅けて來ると亞米利加人が驚いて日本人が馬に乗ることを知て居ると云ふて不思議の顔をして居る爾う云ふ譯けで双方共に事情が少しも分らない夫れから又亞米利加人が案内して諸方の製作所などを見せて呉れた其時は桑港地方にマダ鐵道が出来ない時代である工業は様々の製作所があつてソレを見せて呉れた其處がどうも不思議な譯けで電氣

利用の電燈はないけれども電信はある夫れからガルヴァニの鍍金法と云ふものも實際に行れて居た亞米利加人の考にさう云ふものは日本人の夢にも知らない事だらうと思つて見せて呉た所が此方はチャント知つて居る是れはテレグラフだ是れはガルヴァニの力で斯う云ふことをして居るのだ又砂糖の製造所があつて大きな釜を眞空にして沸騰を早くすると云ふことを遣つて居るッレを懇々と説くけれども此方は知つて居る眞空にすれば沸騰が早くなると云ふことは且つ其砂糖を清淨にするには骨炭で漉せば清淨になると云ふこともチャント知つて居る先方では爾う云ふ事は思ひも寄らぬ事だと斯う察して懇ろに教へて呉れるのであらうが此方は日本に居る中に數年の間そんな事ばかり穿鑿して居たのであるからッレは少しも驚くに足らない只驚いたのは掃溜に行つて見ても濱邊に行つて見ても鐵の多いには驚いた申さば石

油の箱見たやうな物とか色々な罐詰の空殻などが澤山棄てゝある是れは不思議だ江戸に火事があると焼跡に釘拾ひがウヤ／＼出て居る、所で亞米利加に行つて見ると鐵は丸で塵埃同様に棄てゝあるのでどうも不思議だと思ふたことがある
夫れから物價の高いにも驚いた牡蠣を一罎買ふと半弗幾つあるかと思ふと二十粒か三十粒位しかない日本では二十四文か三十文と云ふ其牡蠣が亞米利加では一分二朱もする勘定で恐ろしい物の高い所だ呆れた話だと思つたやうな次第で社會上政治上經濟上の事は一向分らなかつた

所で私が不圖胸に浮かんで或人に聞て見たのは他でない今華盛頓の子孫は如何なつて居るかと尋ねた所が其人の云ふに華盛頓の子孫には女がある筈だ今如何して居るか知らないが何でも誰かの内室にな

つて居る容子だと如何にも冷淡な答で何とも思て居らぬ是れは不思議だ勿論私も亞米利加は共和國大統領は四年交代と云ふことは百も承知のことながら華盛頓の子孫と云へば大變な者に違ひないと思ふたのは此方の腦中には源頼朝徳川家康と云ふやうな考があつてソレから割出して聞た所が今の通りの答に驚いて是れは不思議と思ふたことは今でも能く覺えて居る理學上の事に就ては少しも膽を潰すこと云ふことはなかつたが一方の社會上の事に就ては全く方角が付かなかつた或時にメーリアイランドの海軍港に居る甲比丹のマツキヅガルと云ふ人が日本の貨幣を見たいと云ふので艦長は豫てそんな事の爲めに用意したものと見え新古金銀が數々あるから慶長小判を始めとして萬延年中迄の貨幣を揃へて甲比丹の處へ送て遣た所が珍らしいと計りで寶を貰たと云ふ考は一寸とも顔色に見えない昨日は

誠に有難うと云て其翌朝お内儀さんが花を持って來て呉れた私は其取次をして獨り竊に感服した人間と云ふものはア、ありがたい如何にも心の置き所が高尙だ金や銀を貰たからと云てキョト〜悦ぶと云ふのは卑劣な話だア、ありがたいものだと大きに感心したことがある前に云ふた通り亞米利加人は誠に能く世話をして呉れた軍艦を船渠に入れて修覆して呉れたのみならず乗組員の手元に入用な箱を拵へて呉れるとか云ふことまでも深切にして呉れたいよ〜船の仕度も出來て歸ると云ふ時に軍艦の修覆其他の入用を拂ひたいと云ふと彼方の人は笑て居る代金などは何の事だと云ふやうな調子で一寸とも話にならない何と云ふても勘定を取りさうにもしない其時に私と通辯の中濱萬次郎と云ふ人と兩人がウエブストルの字引を一冊づゝ買つて來た是れが日本にウエブストルと云ふ字引の輸入

第一番、それを買つてモウ外には何も残るとなく首尾克く出帆して来た、所で私が二度目に亞米利加に行たとき甲比丹ブルックに再會して八年目に聞いた話がある、それは最初日本の威臨丸が亞米利加に着たとき桑港で中々議論があつた、今度日本の軍艦が来たから其接待を盛にしなければならぬと云ふので彼處に陸軍の出張所を見たやうなものがある、其處へ甲比丹ブルックが行て大に歡迎しやうではないかと相談を掛けると華盛頓に伺ふた上でなければ出来ないと言ふ、そんな事をして居ては間に合はないから何でも出張所の獨斷で遣れと談じても兎角埒が明かないから甲比丹は少し立腹していよ、政府の筋で出来なければ此方に仕様があると云て夫れから方向を轉じて桑港の義勇兵に持込んでどうだ斯う云ふ譯けであるから接待せぬかと云ふと義勇兵は大悦びで直に用意が出来た全體此義勇兵と云ふものは不

の斷軍役のあるではなし、大將は、お醫者様で少將は、染物屋の主人と云ふやうな者で組立てゝあるけれどもチャント軍服も持て居れば鐵砲も何もすつかり備へて居て日曜か何か暇な時か又は月夜などに操練をしてイザ戦争と云ふ時に出て行くと云ふばかりで太平の時は先づ若い者の道樂仕事であるから折角拵へた軍服も滅多に着るとがない所に今度甲比丹ブルックの話をして千歳一遇の好機會と思ひ晴れの軍服を光らして日本の軍艦威臨丸を歡迎したのであると甲比丹が話して居ました。

祝砲と共に目出度桑港を出帆して今度は布哇寄港と定まり水夫は二三人亞米利加から連れて来たけれども甲比丹ブルックは居らず本當の日本人ばかりで何やら斯うやら布哇を捜出して其處へ寄港して三四日逗留した、逗留中布哇の風俗に就ては物珍しく云ふ程の要用は

ないだらうと思ふのは三十年前の布哇も今も變たことはなからう其土人の風俗は汚ない有様で一見蠻民と云ふより外仕方がない王様に
も遇ふたが是れも國王陛下と云へば大層なやうだけれども其處へ行
て見れば驚く程の事はない夫婦連で出て来て國王は只羅紗の服を着
て居ると云ふ位な事家も日本で云へば中位の西洋造り寶物を見せる
と云ふから何かと思たら鳥の羽で拵へた敷物を持って来て是れが一番
のお寶物だと云ふあれが皇弟か其皇弟が策を提げて買物に行くやう
な譯けでマア村の漁師の親方ぐらゐの者であつた
それから布哇で石炭を積込んで出帆した其時に一寸した事だが奇談
がある私は豫て申す通り一體の性質が花柳に戯れるなど云ふこと
は假初にも身に犯した事のないのみならず口でもそんな如何はしい
話をした事もないソレゆゑ同行の人は妙な男だと云ふ位には思ふて

居たらう夫れから布哇を出帆した其日に船中の人に寫眞を出して見
せた是れはどうだ其寫眞は此處に在りと福澤先生が筆記者に示され
たるものを見るに四十年前の福澤先生の傍に立ち居るは十五六の少
女なり其寫眞と云ふのは此通りの寫眞だらうソコで此少女が藝者か
女郎か娘かは勿論其時に見さかひのある譯けはない——お前達は桑
港に長く逗留して居たが婦人と親しく相並んで寫眞を撮るなどと云
ふことは出来なかつたらうサアどうだ朝夕口でばかり下らない事を
云て居るが實行しなければ話にならないぢやないかと大に冷かして
遣た是れは寫眞屋の娘で歳は十五とか云た其寫眞屋には前にも行た
ことがあるが丁度雨の降る日だ其時私獨りで行た所が娘が居たから
お前さん一緒に取らうではないかと云ふと亞米利加の娘だから何と
も思ひはしない取りませうと云ふて一緒に取たのである此寫眞を見

せた所が船中の若い士官達は大に驚いたけれども口惜しくも出来なからうと云ふのは桑港で此事を云出すと直に眞似をする者があるから黙て隠して置いていよく布哇を離れてもう亞米利加にも何處にも縁のないと云ふ時に見せて遣て一時戯に人を冷かしたことがある歸る時は南の方を通たと思ふ行くときは遠て至極海上は穩かでも其歳には閩があつて閩を置めて五月五日の午前に浦賀に着した浦賀には是非錨を卸すと云ふのが極りで浦賀に着するや否や船中數十日の其間は勿論湯に這入ると云ふことの出来る譯けもない口嗽をする水がヤット出ると云ふ位な事で身體は汚れて居るし髪はクシャ／＼になつて居る何は扱置き一番先に月代をして夫れから風呂に這入らうと思ふて小舟に乗て陸に着くと木村のお迎が數十日前から浦賀に詰掛けて居て木村の家來に島安太郎と云ふ用人があるソレ

が海岸まで迎ひに来て私が一番先に陸に上て其島に遇ふた正月の初に亞米利加に出帆して浦賀に着くまでと云ふものは風の便りもない郵便もなければ船の交通と云ふものもない其間は僅に六箇月の間であるが故郷の様子は何も聞かないから殆んど六ケ年も遇はぬやうな心地ヒヨいと浦賀の海岸で島に遇てイヤ誠に久振り時に何か日本に變た事はないかと尋ねた所が島安太郎が顔色を變へてイヤあつたともく大變な事が日本にあつたと云ふ其時私が一寸と島さん待て呉れ云ふて呉れるな私が中て見せやう大變と云へば何でも是れは水戸の浪人が掃部様の邸に暴込んだと云ふやうな事ではないかと云ふと島は更らに驚きどうしてお前さんはそんな事を知て居る何處で誰れに聞た聞たつて聞かないたつて分るぢやないか私はマア雲氣を考へて見るにそんな事ではないかと思ふイヤ是れはどうも驚いた邸に

暴込んだ所ではない斯うく云ふ譯けだと云て櫻田騷動の話をした其歳の三月三日に櫻田に大騷動のあつた時であるから其事を話したので天下の治安と云ふものは大凡そ分るもので私が出立する前から世の中の様子を考へて見るとどうせ騷動がありさうな事だと思て居たから偶然にも中たので誠に面白かつた其前年から徐々攘夷説が行れると云ふ世の中になつて来て亞米利加に逗留中艦長が玩具半分に蝙蝠傘を一本買った珍しいものだと云て皆寄つて拵くつて見ながら如何だらう之を日本に持て歸てさして廻たらイヤそれは分切て居る新錢座の艦長の屋敷から日本橋まで行く間に浪人者に斬られて仕舞ふに違ひない先づ屋敷の中で折節ひろげて見るより外に用のない品物だと云たことがある凡そ此くらゐな世の中

で歸國の後には日々攘夷論が盛になつて來た

亞米利加から歸てから塾生も次第に増して相替らず教授して居る中に私は亞米利加渡航を幸に彼の國人に直接して英語ばかり研究して歸てからも出来るだけ英書を讀むやうにして生徒の教授にも蘭書は教へないで悉く英書を教へる所がマダなか／＼英書が六かしくて自由自在に讀めない讀めないから便る所は英蘭對譯の字書のみ教授とは云ひながら實は教ふるが如く學ぶが如く共に勉強して居る中に私は幕府の外國方(今で云へば外務省)に雇はれた其次第は外國の公使領事から政府の閣老又は外國奉行へ差出す書翰を翻譯する爲めである當時の日本に英佛等の文を讀む者もなければ書く者もないから諸外國の公使領事より來る公文には必ず和蘭の翻譯文を添ふるの慣例にてありしが幕府人に横文字讀む者としては一人もなく止むを得ず吾々如き陪臣(大名の家來)の蘭書讀む者を雇ふて用を辨じたことであるが

二〇二
雇はれたに就ては自から利益のあると云ふのは例へば英公使米公使
と云ふやうな者から來る書翰の原文が英文でソレに和蘭の譯文が添
ふてある如何かして此翻譯文を見ずに直接に英文を翻譯してやりた
いものだと思つて試みる試みて居る間に分らぬ處がある分らぬと蘭譯
文を見る見ると分ると云ふやうな譯けでなか／＼英文研究の爲めに
なりましたソレからも一つには幕府の外務省には自から書物があ
る種々様々な英文の原書がある役所に出て居て讀むのは勿論借りて
自家へ持て來ることも出来るからソんな事で幕府に雇はれたのは身
の爲めに大に便利になりました

歐羅巴各國に行く

私が亞米利加から歸たのは萬延元年その年に華英通語と云ふものを

翻譯して出版したことがある是れが抑も私が出版の始まり先づ此兩
三年間と云ふものは人に教ふると云ふよりも自分で以て英語研究が
專業であつた所が文久二年の冬日本から歐羅巴諸國に使節派遣と云
ふことがあつて其時に又私は其使節に附て行かれる機會を得ました
此前亞米利加に行く時には私に木村攝津守に懇願して其從僕と云ふ
ことにして連れて行つて貰たが今度は幕府に雇はれて居て歐羅巴行を
命ぜられたのであるから自から一人前の役人のやうな者になつて金
も四百兩ばかり貰たかと思ふ旅中は一切官費で只手當として四百兩
の金を貰たから誠に世話なしソコで私は平生頓と金の要らない男で
徒に金を費すと云ふことは決してない四百兩貰た其中で百兩だけ國
に居る母に送つてやつた如何にも母に對して氣の毒だと云ふのは亞米
利加から歸てマダ國の親の機嫌を聞きに行きもせず重ねて歐羅巴

に行くと言ふのだから如何にも濟まない而已ならず私が亞米利加旅行中にも郷里中津の者共が色々様々な風聞を立て、亞米利加に行て彼の地で死んだと云ひ甚だしきに至れば現在の親類の中の一人が私共の母に向て誠に氣の毒な事ぢや諭吉さんもうとうとう亞米利加で死んで身體は醜けにして江戸に持て歸たさうだなんと威すのか冷すのかソんな事まで云て母を黽て居たと云ふやうな事では是れも時節柄で我慢して黙て居るより外に仕方がないとして居ながら母に對しては如何にも氣が濟まない金をやつたからと云てソレで償へる譯けのものではないけれどもマア、百兩だの二百兩だのと云ふ金は生れてから見たこともない金だからソレでも送て遣らうと思て幕府から請取た金を分けて送りました

それから歐羅巴に行くと言ふことになつて船の出發したのは文久元

年十二月の事であつた此度の船は日本の使節が行くと云ふ爲めに英吉利から迎船のやうにして來たオーデンと云ふ軍艦で其軍艦に乗て香港新嘉堡と云ふやうな印度洋の港々に立寄り紅海に這入て蘇士から上陸して蒸汽車に乗て埃及のカイロ府に着て二晩ばかり泊りそれから地中海に出て其處から又船に乗て佛蘭西の馬耳塞ソコチ蒸汽車に乗て里昂に一泊巴里に着て滞在凡そ二十日使節の事を終り巴里を去て英吉利に渡り英吉利から和蘭和蘭から普魯西の都の伯林に行き伯林から露西亞のペートルスボルグ夫れから再び巴里に歸て來て佛蘭西から船に乗て葡萄牙に行きソレカラ地中海に這入て元の通りの順路を経て歸て來た其間の年月は凡そ一箇年即ち文久二年一杯推詰つてから日本に歸て來ました

扱今度の旅行に就て申せば私も此時にはモウ英書を讀み英語を語る

と云ふことが徐々出来て夫れから前に申す通りに金も聊か持て居る
 其金は何も遣ひ所はないから只日本を出る時に尋常一様の旅装をし
 た丈けで其當時は物價の安い時だから何もそんなに金の要る譯けが
 ない其餘た金は皆携へて行て龍動に逗留中外に買物もない唯英書ば
 かりを買て來た是れが抑も日本へ輸入の始まりで英書の自由に使は
 れるやうになつたと云ふのも是れからの事である
 夫れから彼の國の巡回中色々觀察見聞したことも多いが是れは後の
 話にして先づ使節一行の有様を申さんに其人員は

- 竹内下野守正使 松平石見守副使 京極能登守御目付 柴田貞太郎組頭 日高圭三郎
- 御勘 福田作太郎御徒士 水品樂太郎調役 岡崎藤左衛門同 高嶋祐啓醫
- 師但し漢 川崎道民醫 益頭駿次郎御普請役 上田友助定役 森鉢太郎定福地
- 法醫なり 源一郎通辨 立廣作同 太田源三郎同 齋藤大之進同 高松彦三郎御小人 山

田八郎同 松木弘安方反譯 箕作秋坪同 福澤諭吉同

右の外に三使節の家來兩三人づゝと賄小使六七人この小使の中には
 内證で諸藩から頼んで乗込んだ立派な士人もある松木箕作福澤等は
 先づ役人のやうな者ではあるが大名の家來所謂陪臣の身分であるか
 ら一行中の一番下席で惣人數凡そ四十人足らず孰れも日本服に大小
 を横へて巴里龍動を濶歩したも可笑しい日本出發前に外國は何でも
 食物が不自由だからと云ふので白米を箱に詰めて何百箱の兵糧を貯
 へ又旅中止宿の用意と云ふので廊下に燈す金行燈二尺四方もある
 鐵網作りの行燈を何十臺も作り其外提灯手燭ボンボリ 蠟燭等に至る
 まで一切取揃へて船に積込んだ其趣向は大名が東海道を通行して宿
 驛の本陣に止宿する位の胷算に違ひない夫れからいよゝ巴里に着
 して先方から接待員が迎ひに出て來ると一應の挨拶終りて先づ此方

よりの所望は随行員も多勢なり荷物も多いことゆゑ下宿は成る可く
 本陣に近い處に頼むと云ふのは萬事不取締不安心だから一行の者を
 使節の近處に置きたいと云ふ意味でせう、スルト接待員はゐるさい承知
 して先づ人數を聞糺し惣勢三十何人と分て是ればかりの人數なれば
 一軒の旅館に十組や二十組は引受けますとの答に何の事やら譯けが
 分らぬ、ソレカラ案内に連られて止宿した旅館は巴里の王宮の門外に
 あるホテルデロウブルと云ふ廣大な家で五階造り六百室、婢僕五百餘
 人、旅客は千人以上差支なしと云ふので日本の使節などは何處に居る
 やら分らぬ唯旅館中の廊下の道に迷はぬやうに當分はソレが心配で
 した、各室には温めた空氣が流通するからストーヴもなければ蒸氣も
 なし無数の瓦斯燈は室内廊下を照して日の暮るゝを知らず食堂には
 山海の珍味を並べて如何なる西洋嫌ひも口腹に攘夷の念はない皆喜

んで之を味ふから爰に手持不沙汰なるは日本から脊負て來た用意の
 品物で、ホテルの廊下に金行燈を點けるにも及ばずホテルの臺所で米
 の飯を炊くことも出來ずとう／＼仕舞には米を始め諸道具一切の雜
 物を接待掛りの下役のランベヤと云ふ男に進上して唯貰て貰ふたの
 も可笑しかつた

先づこんな鹽梅式だから吾々一行の失策物笑ひは數限りもないシガ
 一とシユガーを間違へて烟草を買ひに遣て砂糖を持て來るもあり醫
 者は人參と思つて買つて來て生姜の粉であつたこともある又或るときに
 三使節中の一人が便所に行く家來がボンボリを持って御供をして便所
 の二重の戸を開放しにして殿様が奥の方で日本流に用を達す其間家
 來は袴着用殿様の御腰の物を持って便所の外の廊下に開き直してチャ
 ト番をして居る其廊下は旅館中の公道で男女往來織るが如くにして

便所の内外瓦斯の光明晝よりも明なりと云ふから堪らない私は丁度其處を通り掛て驚いたとも驚くまいとも先づ表に立塞がつて物も言はずに戸を打締めて夫れからそろ／＼其家來殿に話したことがある政治上の事に就ては龍動巴里等に在留中色々な人に逢ふて色々な事を聞たが固より其事柄の由來を知らぬから能く分る譯けもない當時は佛蘭西の第三世ナポレオンが歐洲第一の政治家と持囃されてエライ勢力であつたが隣國の普魯士も日の出の新進國で油斷はならぬ塊地利との戦争又アルサス、ローレンスの事なども國交際の問題として何れ後年には云々の變亂が生ずるであらうなんと云ふことは朝野政通の豫言する所で私の日記覺書にもチヨイ／＼記してある又龍動に居るとき或る社中の人が社名を以て議院に建言したと云ふて其草稿を日本使節に送て來た建言の趣意は在日本英國の公使アールコック

が新開國たる日本に居て亂暴無狀恰も武力を以て征服したる國民に臨むが如し云々とて種々様々の證據を擧げて公使の罪を責る其證據の一つに公使アールコックが日本國民の靈場として尊拜する芝の山内に騎馬にて乗込たるが如き言語に絶えたる無禮なりと痛論したる節もある私は此建言書を見て大に胸が下つた成るほど世界は鬼ばかりでない是れまで外國政府の仕振を見れば日本の弱身に付込み日本人の不文殺伐なるに乗じて無理難題を仕掛けて眞實困て居たが其本國に來て見れば公明正大優しき人もあるものだと思てます／＼平生の主義たる開國一偏の説を堅固にしたことがある又各國巡回中待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない是れは三百年來特別の關係で爾うなければならぬ殊に私を始め同行中に横文字讀む人で蘭文を知らぬ者はないから文書言語で云へば歐羅巴中第二の故郷に歸た

やうな譯(わけ)けで自然(じぜん)に居心(ゐこころ)が宜(よろ)い、夫(つま)れは扱置(あつか)き和蘭(オランダ)滯留(ちりゅう)中に奇談(きだん)がある或(ある)るとき使節(しせつ)がアムステルダムに行(い)つて地方(ちほう)の紳士(しんし)紳商(しんしょう)に面會(めんかい)四方(はつぽう)の話(はなし)の序(ついで)に使節(しせつ)の問(と)に「此(こゝ)アムステルダム府(ふ)の土地(とち)は賣買(ばいばい)勝手(かたて)なるかと云(い)ふに彼(か)の人(ひと)答(こた)へて「固(もと)より自由(じゆう)自在(じざい)外國人(がいこくじん)へも賣(う)るか直段(ちかんだん)次第(だいい)にでも又(また)何(なに)ほどにても左(ひだり)れば爰(こゝ)に外國人(がいこくじん)が大資本(だいしほん)を投(な)じて廣(ひろ)く土地(とち)を買(か)ひし之(これ)に城廓砲臺(じやうかくぱうたい)でも築(きず)くことがあつたら夫(つま)れでも勝手(かたて)次第(だいい)かと云(い)ふに彼(か)の人(ひと)も妙(めう)な顔(かほ)をしてソナナ事は是(こゝ)れまで考(かんが)へたことはない如何(いか)に英佛(えいふく)その他(た)の國々(こくぐ)に金満家(きんまんか)が多(おほ)いとて他國(たこく)の地面(ぢめん)を買(か)つて城(しろ)を築(きず)くやうな馬鹿氣(ばかぎ)な商人(しやうじん)はありますまいと答(こた)へて双方(はうほう)共に要(よう)領(りやう)を得(え)ぬ様子(ようす)で私共(わがら)は之(これ)を見て實(じつ)に可笑(わか)しかつたが當時(たうじ)日本(にっぽん)の外交(がいこう)政略(せいりやく)は凡(およ)そ此邊(このへん)から割出(わきだ)したものであるから堪(た)まらない譯(わけ)けさ
夫(つま)れは扱置(あつか)き私が此(こゝ)前亞米利加(ぜんあめりか)に行(い)つたときにはカリフォルニア地方(ちほう)に

マダ鐵道(てつどう)がなかつたから勿論(もちろん)鐵道(てつどう)を見たことがないけれども今度(こんど)は蘇士(スエズ)に上(あ)つて始めて鐵道(てつどう)に乘(の)りソレカラ歐羅巴(オウロパ)各國(こく)を彼方(あち)此方(こち)と行くにも皆(みな)鐵道(てつどう)ばかり到(いた)る處(ところ)に歡迎(くわんげい)せられて海陸軍(かいりくぐん)の場所(ばしょ)を始めとして官私(くわんし)の諸工場(しよこうじやう)銀行會社(ぎんぎやうかいしゃ)寺院(いんげん)學校(がく)俱樂部(くらくぶ)等は勿論(もちろん)病院(びやういん)に行(い)けば解剖(かいぶ)も見(み)せる外科手術(げいこうしゆじゆ)も見(み)せる或(ある)は名(な)ある人(ひと)の家(いへ)に晚餐(ばんさん)の饗應(きやうおう)舞踏(まいた)の見物(けんぶつ)など誠(まこと)に親切(しんせつ)に案内(あんない)せられて却(かへ)つて招待(せうたい)の多(おほ)いのに草臥(くたび)れると云(い)ふ程(ほど)の次第(だいい)であつたが唯(ただ)こゝに一つ可笑(わか)しいと云(い)ふのは日本(にっぽん)は其時(そのとき)丸(まる)で鎖國(さこく)の世(よ)の中で外國(がいこく)に居(ゐ)ながら兎角(とくかく)外國人(がいこくじん)に遇(あ)ふことを止(と)めやうとするのが可笑(わか)しい使節(しせつ)は竹内松平(たけのうちまつだいら)京極(きんぎく)の三使節(さんしせつ)その中の京極(きんぎく)は御目附(ごめつけ)と云(い)ふ役目(やくめ)でソレには又(また)相應(さうおう)の屬官(ぞくくわん)が幾人(いくにん)も附(つ)いて居(ゐ)るソレが一切(いっけい)の同行(どうぎやう)人(ひと)を目(め)ツ張子(はりこ)で見て居(ゐ)るのでなか／＼外國人(がいこくじん)に遇(あ)ふとが六(む)かしい同行者(どうぎやうしや)は何(なん)れも幕府(ばくふ)の役人(やくにん)連(れん)で其中(そのうち)に先(ま)づ同志(どうし)同感(どうかん)互(たがひ)に目的(もくてき)を

共にすると云ふのは箕作秋坪と松木弘安と私と此三人は年來の學友
 で互に往來して居たので彼方に居ても此三人だけは自然別なものに
 ならぬ何でも有らん限りの物を見やうと計りして居るソレが役人連
 の目に面白くないと見え殊に三人とも陪臣で然かも洋書を讀むと云
 ふから中々油斷をしない何か見物に出掛けやうとすると必ず御目附
 方の下役が附いて行かなければならぬと云ふ御定まりで始終附て廻
 る此方は固より密賣しやうではなし國の秘密を洩らす氣遣ひもない
 が妙な役人が附て來れば只蒼蠅い蒼蠅いのはマダ宜いが其下役が何
 か外に差支があると私共も出ることが出來ないソレは甚だ不自由で
 した私は其時に——是れはマア何の事はない日本の鎖國を其まゝ擔
 いで來て歐羅巴各國を巡回するやうなものだと云て三人で笑たこと
 がありますソレでも私共は見やうと思ふものは見聞かうと思ふ事は

聞たが序ながら此見聞のことに就て私の身の耻を云はねばならぬ私
 は少年の時から至極元氣の宜い男で時として大言壯語したことも多
 いが天稟氣の弱い性質で殺生が嫌ひ人の血を見るのが大嫌ひ例へ
 ば緒方の塾に居るときは刺絡流行の時代で同窓生は勿論私も腕の脈
 に針をして血を取たことがある所が私は自分でも他人でも其血の出
 るのを見て心持が善くないから刺絡と云へばチャント眼を閉ちて見
 ないやうにして居る腫物が出来ても針をすることは先づ見合せたい
 と云ひ一寸とした怪我でも血が出ると顔色が青くなる毎度都會の地
 にある行倒首縊變死人などは何としても見ることが出來ない見物ど
 ころか死人の話も聞いても逃げて廻ると云ふやうな臆病者である所が
 露西亞に滯留中或る病院に外科手術があるから見物せよとの案内に
 箕作も松木も醫者だから直ぐに出掛ける私にも一處に行けと無理に

勧めて連れて行かれて外科室に這入て見れば石淋を取出す手術で執
 刀の醫師は合羽を着て病人をば俎のやうな臺の上に寝かしてコロ、
 ホルムを臭がせて先づ之を殺して夫れから其醫師が光り耀く刀を執
 てグット刺すと大造な血が迸つて醫師の合羽は眞赤になる夫れから刀
 の切口に釘抜のやうなものを入れて膀胱の中にある石を取出すとか
 云ふ様子であつたが其中に私は變な心持になつて何だか氣が遠くな
 つた、スルト同行の山田八郎と云ふ男が私を助けて室外に連出し水な
 ど呑まして呉れてヤット正氣に返た、其前獨逸の伯林の眼病院でも歎
 目の手術とて子供の眼に刀を刺す處を半分ばかり見て私は急いで其
 場を逃出して其時には無事に済んだことがある松木も箕作も私に意
 氣地がないと云て頻りに笑ひ頻りに冷かすけれども持て生れた性質
 は仕方がない生涯これで死ぬことでせう夫れは扱置き私の歐羅巴巡

回中の胸算は凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を讀で
 分らぬ處は字引を引て調べさへすれば分らぬ事はないが外國の人に
 一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云ふやうな事が此方で
 は一番六かしいだから原書を調べてソレで分らないと云ふ事だけを
 此逗留中に調べて置きたいものだと思て其方向で以て是れは相當の
 人だと思へば其人に就て調べると云ふことに力を盡して聞くに従て
 一寸々々斯う云ふやうに(此時先生細長くして古々しき一小冊子を示
 す)記して置て夫れから日本に歸てからソレを臺にして尙ほ色々な原
 書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云ふものが出来ました
 凡そ理化學器械學の事に於て或はエレキトルの事蒸汽の事印刷の事
 諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云ふのは
 元來私が専門學者ではなし聞た所が眞實深い意味の分る譯けはない

唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るからコンナ事の詮索は先づ二の次にして外に知りたいたいが澤山ある例へばコ、に病院と云ふものがある所で其入費の金はどんな鹽梅にして誰が出して居るのか、又銀行と云ふものがあつて其金の支出入は如何して居るか、郵便法が行れて居て其法は如何云ふ趣向にしてあるのか、佛蘭西では徴兵令を厲行して居るが英吉利には徴兵令がないと云ふ其徴兵令と云ふのは抑も如何云ふ趣向にしてあるのか、其邊の事情が頓と分らないソレカラ又政治上の選舉法と云ふやうな事が皆無分らない、分らないから選舉法とは如何な法律で議院とは如何な役所かと尋ねると彼方の方は只笑て居る何を聞くのか分り切た事だと云ふ様な譯、ソレが此方では分らなくてどうにも始末が付かない又黨派には保守黨と自由黨と徒黨のやうな者があつて双方負けず

劣らず鎬を削て争ふて居ると云ふ何の事だ太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云ふサア分らないコリヤ大變なことだ何をして居るのか知らん少しも考の付かう筈がない彼の人と此の人とは敵だなんと云ふて同じテーブルで酒を飲んで飯を喰て居る少しも分らないソレが略分るやうにならうと云ふまでには骨の折れた話で其謂れ因縁が少しづゝ分るやうになつて來て入組んだ事柄になると五日も十日も掛けてヤット胸に落とると云ふやうな譯でソレが今度洋行の利益でした

それから其逗留中に誠に情けなく感じたことがあると申すは私共の出立前からして日本國中次第々に攘夷論が盛になつて外交は次第々々に不始末だらけ今度の使節が露西亞に行た時に此方から樺太の境論を持出して其談判の席には私も出て居たので日本の使節がソレ

を云出すと先方は少しも取合はない或は地圖などを持出して地圖の色は斯うく云ふ色ではないか自から此處が境だと云ふと露西亞人の云ふには地圖の色で境が極れば此地圖を皆赤くすれば世界中露西亞の領分になつて仕舞ふだらう又これを青くすれば世界中日本領になるだらうと云ふやうな調子で漫語放言逆も寄付かれないマア兎にも角にもお互に實地を調べた其上の事に爲やうと云ふので樺太の境は極めずに宜加減にして談判は罷になりましたがソレを私が傍から聞て居て是れは逆も仕様がな一切萬事便る所なし日本の不文不明の奴等が売威張りして攘夷論が盛になればなる程日本の國力は段々弱くなる丈けの話で仕舞には如何云ふやうになり果てるだらうかと思つて實に情けなくなりました

國交際の談判は右の通りに水臭い次第であるが使節に對する私の待

遇は爾うでないペートルスボグ滞在中は日本使節一行の爲めに特に官舎を貸渡して接待委員と云ふ者が四五人あつて其官舎に詰切りでいろく饗應する其饗應の仕方と云ふは頗る手厚く何に一つ遺憾はないと云ふ有様ソレで御用がない時は名所舊跡を始め諸所の工場と云ふやうな所に案内して見せて呉れる其中に段々接待委員の人々と懇意になつて種々様々な話もしたが其節露西亞に日本人が一人居ると云ふ噂を聞た其噂はどうも間違ない事實であらうと思はれる名はヤマトフと唱へて日本人に違ひないと云ふ勿論其噂は接待委員から聞たのではない其外の人から洩れたのであるが先づ公然の秘密と云ふ位な事でチャント分て居た其ヤマトフに遇て見たいと思ふけれどもなか／＼遇はれない到頭逗留中出て來ないが其接待中の模様に至ては動もすると日本風の事がある例へば室内に刀掛が

あり寢床には日本流の木の枕があり湯殿には精を入れた糟袋があり食物も勉めて日本調理の風にして箸茶椀なども日本の物に似て居るどうしても露西亞人の思付く物でない、シテ見ると噂の通り何處にか日本人の居るのは間違ひない明に分て居るけれども到頭分らずに歸て仕舞ひました私の西航日記に此事を記して其傍に詩のやうなものが一寸と書てある

起來就食々終眠飽食安眠過一年他日若遇相識問歐天不異故郷天
今日になつて一々記憶もないが餘程日本流の事が多かつたと思はれます

夫れから或日の事で其接待委員の一人が私の處に来て一寸こちらに來て呉れると云て一間に私を連れて行た何だと云て話をすると私の一身上の事に及んでお前は此度使節に付て來たが是れから先は日本

に歸て何をすする所存かソリヤ勿論知らないがお前は太層金持かと尋ねるからイヤ決して金持ではないマア幾らか日本の政府の用をして居る用をして居れば自ら其報酬と云ふものがあるから衣食の道に差支はないものだ」と斯う私は答へた所が接待委員の云ふに「日本の事だから我々に委しい事情の分る譯けはない分りはしないけれどもどうも大體を考へて見た所で日本は小國だア、云ふ小さな國に居て男子の仕事の出來るものぢやないソレよりかお前はヒヨイと茲に心を變へて此露西亞に止まらないか」と云ふから私は答へて「自分の身は使節に隨從して來て居るものであるから爾う勝手に止まられる譯けのものぢやない」と有りのまゝに云ふとイヤ夫れは造作もない話だお前さへ今から決斷して隠れる氣になれば直ぐに私が隠して遣るどうせ使節は長く此處に居る氣遣はない間もなく歸る歸ればソレ切ださうし

てお前は露西亞人になつて仕舞ひなさい此露西亞には外國の人は幾
 らも來て居る就中獨逸の人などは大變に多い其外和蘭人も來て居れ
 ば英吉利人も來て居るだから日本人が來て居たからと云て何も珍し
 い事はない是非此處に止まれいよく止ると決すれば其上はどんな
 仕事でも爲やうと思へば面白い愉快な仕事は澤山ある衣食住の安心
 は勿論随分金持になる事も出来るから止まれと懇に説いたのは決し
 て尋常の戯れでないチャント一間の中に差向ひで眞面目になつて話
 したのであるけれども私が其時に止まると云ふ必要もなければ又止
 まらうと云ふ氣もない宜い加減に返答をして置くと其後二三度同じ
 やうな事を云て來たが固より話は纏らず其時に私は大に心付きまし
 た成程露西亞は歐羅巴の中で一種風俗の變た國だと云ふがソレに違
 ひない例へば今度英佛にも暫く滯留し又前年亞米利加に行たときに

も人に逢ひさへすれば日本に行かうと云ふ者が多い何か日本に
 仕事はないかどうかして一緒に連れて行て呉れないかとソリヤもう
 行く先々でうるさいやうに云ふ者はあれども遂ぞ止まれと云ふこと
 を只の一度も云た人はない露西亞に來て始めて止まれと云ふ話を聞
 た其趣を推察すれば決して是れは商賣上の話ではない如何しても政
 治上又國交際上の意味を含んで居るに違ひないこりやどうも氣の知
 れない國だ言葉に意味を含んで止まれと云ふ所を見れば或は陰險の
 手段を施す爲めではないか知らんと思ふた事があつたけれどもそん
 な事を聞たと云ふことを同行の人に語ることも出来ない語ればどん
 な嫌疑を蒙るまいものでもないから其時に語らぬのは勿論日本に歸
 て來ても人に云はずに黙て居ました或は爾う云ふことを云はれたの
 は私一人でなく同行の者も同じ事を云はれて私と同じ考へで黙て居

た者があつたかも知れない兎に角に氣の知れぬ國だと思はれる
 夫れから露西亞を去て佛蘭西に歸りいよく出發と云ふ其時は生麥
 の大騒動自ち生麥で英人のリチャードソンと云ふものを薩摩の侍が
 斬たと云ふことが丁度彼方に報告になつた時でサア佛蘭西のナポレ
 オン政府が吾々日本人に對して氣不味くなつて來た人民はどうか知
 らないが政府の待遇の冷淡不愛相になつた事は甚だしい主人の方で
 其通りだから客たる吾々日本人のキマリの悪いこと如何にも云ひ様
 がない日本の使節が港から船に乗らうと云ふ其道は十町餘りもあつ
 たかと思ふ道の兩側に兵隊をずつと并べて見送らした是れは敬禮を
 盡すのではなくして日本人を威かしたに違ひない兵士を幾ら并べた
 つて鐵砲を撃つ譯けでないから怖くも何ともありはしないけれども
 其苦々しい有様と云ふものは實に堪らない譯けであつた私の西航記

中の一節に

閏八月十三日二年久朝八時ロシフアルトに着、ロシフアルトは巴里よ
 り佛里にて九十里の處にある佛蘭西の海軍港なり蒸氣車より下り
 船に乗るまでの路十餘町この間盛に護衛の兵卒千餘人を列せり敬
 禮を表するに似て或は威を示すなり日本人は昨夜蒸氣車に乗り車
 中安眠するを得ず大に疲れたるに此處に着して暫時も休息せしめ
 ず車より下りて直に又船に乗らしむ且つ船に乗るまで十餘町の道
 日本の一には馬車を與へず徒歩にて船まで云々
 ソレカラ佛蘭西を出發して葡萄牙のリスボンに寄港し使節の公用を
 濟して又船に乗り地中海に入り印度洋に出で海上無事日本に歸て見
 れば攘夷論の真盛りだ井伊掃部頭は此前殺されて今度は老中の安藤
 對馬守が浪人に疵を付けられた其亂暴者の一人が長州の屋敷に駈込

んだとか何とか云ふ話を聞いて私は其時始めて心付いた成るほど長州藩も矢張り攘夷の仲間に這入て居るのかと斯う思たことがある兎にも角にも日本國中攘夷の眞盛りでどうにも手の着けやうがない所で私の身にして見ると是れまでは世間に攘夷論があると云ふ丈けの事で自分の身に就て危いことは覺えなかつた大阪の塾に居る中に勿論暗殺など云ふことのあらう筈はない又江戸に出て来たからとて怖い敵もなければ何でもないと計り思て居た所がサア今度歐羅巴から歸て来た其上はなか／＼爾うでない段々喧しくなつて外國貿易をする商人が俄に店を片付けて仕舞ふなど云ふやうな事で浪人と名くる者が盛に出て来て何處に居て何をして居るのか分らない丁度今の壯士と云ふやうなものでヒョコ／＼妙な處から出て来る外國の貿易をする商人さへ店を仕舞ふと云ふのであるから況して外國の書を読

で歐羅巴の制度文物を夫れ是れと論ずるやうな者はどうも彼輩は不埒な奴ぢや畢竟彼奴等は虚言を吐て世の中を瞞着する賣國奴だと云ふやうな評判がソロ／＼行れて来てソレから浪士の鋒先が洋學者の方に向いて来た是れは誠に恐入た話で何も私共は罪を犯した覺えはない是れはマア何處まで小さくなれば免るゝかと云ふと幾ら小さくなつても免れない到頭仕舞には洋書を読むことを罷めて仕舞ふて攘夷論でも唱へたらばソレはお詫が濟むだらうがマサカそんな事も出来ない此方が無頓着に思ふ事を遣らうとすれば浪人共は段々きつくなつて来る既に私共と同様幕府に雇はれてゐる翻譯方の中に手塚律藏と云ふ人があつて其男が長州の屋敷に行て何か外國の話をしたら屋敷の若者等が斬て仕舞ふと云ふので手塚はドン／＼駈出す若者等は刀を抜て追蒐る手塚は一生懸命に逃げたけれども逃切れずに寒い

時だが日比谷外の濠の中へ飛込んで漸く助かつた事もある夫れから同じ長州の藩士で東條禮藏と云ふ人も矢張り私と同僚翻譯方で小石川の素と蜀山人の住居と云ふ家に住んで居た所が其家に所謂浮浪の徒が暴込んで東條は裏口から逃出して漸と助つたと云ふやうな譯けでいよく洋學者の身が甚だ危くなつて來て油斷がならぬ左ればとて自分の思ふ所爲す仕事は罷められるものぢやない夫れから私は構はない構はうと云た所が構はれもせず罷めやうと云た所が罷められる譯けでないマア、言語舉動を柔かにして決して人に逆はないやうに社會の利害と云ふやうな事は先づ氣の知れない人には云はないやうにして慎める丈け自分の身を慎んでソレと同時に私は専ら著書翻譯の事を始めた其著譯の一條に就ては今コゝで別段に云ふ事はない私の今年開版した福澤全集の緒言に詳に書てあるから是れは見合せ

るとして其著譯事業中即ち攘夷論全盛の時代に洋學生徒の數は次第次第に殖えるから其教授法に力を盡し又家の活計は幕府に雇はれて扶持米を貰ふてソレで結構暮らせるから世間の事には頓と頓着せず怖い半分面白い半分に歲月を送て居る或時可笑い事があつた私が新錢座に一寸仕居の時新錢座塾に非ず誰方か知らないが御目に掛りたいと云てお侍が参りましたと下女が取次するから「ドンナ人だ」と聞くと「大きな人で眼が片眼で長い刀を挾して居ます」と云ふから「コリヤ物騒な奴だ名は何と云ふ」名はお尋ね申したがお目に掛れば分ると云て被仰しやいません』——どうも氣味の悪い奴だと思て夫れから私は窃と覗いて見ると何でもない筑前の醫學生で原田水山緒方の塾に一緒に居た親友だ思はず罵た此馬鹿野郎貴様は何だ何ぜ名を云て呉れんか乃公は怖くて堪らなかつた」と云て奥に通して色々世間話をして共

々に大笑した事がある爾う云ふ世の中で洋學者もつまらぬ事に驚か
 されて居ました
 夫れから攘夷論と云ふものは次第々々に増長して徳川將軍家茂公の
 上洛となり續いて御親發として長州征伐に出掛けると云ふやうな事
 になつて全く攘夷一偏の世の中となつたソコで文久三年の春英吉利
 の軍艦が來て去年生麥にて日本の薩摩の侍が英人を殺した其罪は全
 く日本政府にある英人は只懇親を以て交らうと思ふて是れまでも有
 らん限り柔かな手段ばかりを執て居た然るに日本の國民が亂暴をし
 て剩へ人を殺した如何にしても其責は日本政府に在て免る可らざる
 罪であるから此後二十日を期して決答せよと云ふ次第は政府から十
 萬磅の償金を取り尙ほ二萬五千磅は薩摩の大名から取り其上罪人を
 召捕て眼の前で刑に處せよとの要求その手紙の來たのが其歳の二月

十九日長々とした公使の公文が來た其時に私共が翻譯する役目に當
 て居るので夜中に呼びに來て赤坂に住居る外國奉行松平石見守の
 宅に行たのが私と杉田玄端高畑五郎其三人で出掛けて行て夜の明け
 るまで翻譯したが是れはマアどうなる事だらうか大變な事だと竊に
 心配した所が其翌々二十一日には將軍が危急存亡の大事を眼前に見
 ながら其れを棄て、置いて上洛して仕舞ふた爾うするとサア二十日の
 期限がチャント來た十九日に手紙が來たのだから丁度翌月十日所が
 もう二十日待て呉れるソレは待つ所の待たないのと擲着の末どうやら
 斯うやら待て貰ふことになつた所でいよゝ償金を拂ふか拂はない
 かと云ふ幕府の評議がなかゝ決しない其時の騒動と云ふものは江
 戸市中そりやモウ今に戦争が始まるに違ひない何日に戦争がある杯
 と云ふ評判其二十日の期限も既に過去て又十日と云ふことになつて

始終十日と二十日の期限を以て次第々々に返辭を延して行く私は其
 時に新錢座に住で居たから逆もこりや戦争になりさうだなればどう
 も逃げるより外に仕様がないとソロ／＼逃仕度をするると云ふやうな
 事でソコで愈よ期日も差迫て今度にも掛値なし一日も負からな
 と云ふ日になつたと云ふのは私は政府の翻譯局に居て詳に知て居る
 から尙ほ堪らない其翻譯をする間に時の佛蘭西のミニストル、ペレク
 ルと云ふ者がどう云ふ氣前だか知らないが大層な手紙を政府に出し
 て今度の事に就て佛蘭西は全く英吉利と同説だ愈よ戦端を開く時に
 は英國と共に軍艦を以て品川沖を暴れ廻ると亂暴な事を云ふて來
 た誠に謂れない話で丸で其趣は今の西洋諸國の政府が支那人を威
 すと同じ事で政府は唯英佛人の劍幕を見て心配する計り私には能く
 其事情が分る分れば分るほど氣味が悪い是れはいよ／＼遣るに違ひ

ないと鑑定して内の方の政府を見れば何時迄も説が決しない事が喧
 しくなれば閣老は皆病氣と稱して出仕する者がないから政府の中心
 は何處に在るか譯が分らず唯役人達が思ひ／＼に小田原評議のグツ
 ぐで愈よ期日が明後日と云ふやうな日になつてサア荷物を片付け
 なければならぬ今でも私の處に疵の付た筆筒がある愈よ荷物を片付
 けやうと云ふので筆筒を細引で縛つて青山の方へ持て行けば大丈夫だ
 らう何も只の人間を害する氣遣はないからと云ふので青山の穩田と
 云ふ處に吳黄石と云ふ藝州の醫者があつて其人は箕作の親類で私は
 兼て知て居るから吳の處に行てどうか暫く此處に立退場を頼むと相
 談も調ひ愈よ青山の方と思ふて荷物は一切拵へて名札を付けて擔出
 す計りにしてさうして新錢座の海濱にある江川の調練場に行て見れ
 ば大砲の口を海の方に向けて撃つやうな構へにしてある是れは今明

日の中にいよく事は始まると覺悟を定めた其前に幕府から布令が
 出である愈よ兵端を開く時には濱御殿今の延遠館で火矢を擧げるか
 らソレを相圖に用意致せと云ふ市中に布令が出た江戸ッ子は口の惡
 いもので瓢箪兵の開け初めは冷火ひやでやると川柳があつたが是れでも
 時の事情は分る
 夫れから又可笑しい事がある私の考へに是れは何でも戦争になるに
 違ひないからマア米を買はうと思て出入の米屋に申付けて米を三十
 俵買て米屋に預け仙臺味噌を一樽買て納屋に入れて置た所が期日が
 切迫するに從て切迫すればするほど役に立たないものは米と味噌其
 三十俵の米を如何すると云ふた所が擔いで行かれるものでもなければ
 味噌樽を脊負て駈けることも出来なからう是れは可笑しい昔は戦
 争のとき米と味噌があれば宜いと云たが戦争の時ぐらゐる米と味噌の

邪魔になるものはない是れはマア逃げる時は此米と味噌樽は棄てゝ
 行くより外はないと云て其騒動の眞盛りには大笑ひを催した事がある
 其時にも新錢座の家に學生が幾人か居て私は其時二分金で百兩か百
 五十兩持て居たから此金を獨りで持て居ても策でないイザと云へば
 誰が何處にどう行くか分らない金があれば先づ餒ゑるとはないから
 此金は私が一人で持て居るよりか家内が一人で持て居るよりか是れ
 は銘々に分けて持つが宜からうと云ふので其金を四つか五つに分け
 て頭割にして銘々ソレを腰に巻て行かうと用意金の分配まで出來て
 明日か明後日は愈よ戦争の始まり外に道はないと覺悟した所が茲に
 幸な事があると云ふのは其時に唐津の殿様で小笠原壹岐守と云ふ閣
 老がある夫れから横濱に淺野備前守と云ふ奉行があるソレ等の人
 極秘密に云合せた事と見えて五月の初旬十日前後と思ひますが愈よ

今日と云ふ日に前日まで大病だと云て寝て居た小笠原壹岐守がヒヨ
 イと其朝起きて日本の軍艦に乗て品川沖を出て行く、スルト英吉利の
 砲艦が壹岐守の船の尻に尾いて走ると云ふのは壹岐守は上方に行く
 と云て品川灣を出發したから若し本當に其方針を取て本牧の鼻を廻
 れば英人は後から砲撃する筈であつたと云ふ所が壹岐守は本牧を廻
 らずに横濱の方へ這入て自分の獨斷で即刻に償金を拂ふて仕舞た十
 萬磅を時の相場にすればメキシコ弗で四十萬になる其正銀を英公使
 セント ジョン ニールに渡して先づ一段落を終りました
 幕府に要求した十萬磅の償金は五月十日に片付て夫れから今度は其
 英軍艦が鹿兒島に行て被害者遺族の手當として二萬五千磅を要求し
 且つ其罪人を英國人の見て居る所で死刑に處せよと云ふ掛合の爲め
 に六艘の軍艦は鹿兒島灣に廻て錨を卸した、スルト薩摩藩から直ちに

來意訪問の使者が來る英の旗艦の水師提督はクーバー司令長官はウ
 キルモット船長はジョスリングと云ふ人で書翰を薩摩の役人に渡し
 應否の返答如何と待て居る所がなか／＼容易な事に返辭が出来ない
 ソレコレする中に薩摩に西洋形の船即ち西洋から薩摩藩に買取た船
 が二艘ある其二艘の船を談判の抵當に取ると云ふ趣意で櫻島の側に
 碇泊してあつた二艘の船を英の軍艦が引張て來ると云ふ手詰の場合
 になつた、スルト陸の方から此様子を見ていよ／＼發砲し始めて陸か
 ら發砲すれば海からも發砲してドン／＼大合戦になつたと云ふのが
 丁度文久三年五月下旬何でも二十八九日頃である其時に英の旗艦は
 マダ陸からは發砲しないことゝ思て錨を擧げずに居た所が俄に陸の
 方で撃始めたものだからサア錨を上げやうとすると生憎其時は大變
 な暴風加ふるに海が最も深いからドウも錨を上げる邊がないと云ふ

ので錨の鎖を切て夫れから運動するやうになつた是れが例の英吉利の軍艦の錨が薩摩の手に入た由來であるソコで陸から打つ鐵砲もなか／＼エライ専ら旗艦を狙ふて命中するものも多し其中に大きな丸い破裂弾が旨く發して怪我人が出來た中に司令長官と甲比丹と二人の將官が即死して船中の騒動又船から陸に向ての砲撃もなか／＼劇しく海岸の建物は火に焼拂ふて是れも容易ならぬ損害であつたが詰る所勝負なしの戦争と云ふのは薩摩の方は英吉利の軍艦を撃て二人の將官まで殺したけれども其船を如何することも出來ない又軍艦の方でも陸を焼拂ふて随分荒したことは荒したけれども上陸することには出來ない双方共に勝ちも負けもせず英の軍艦が横濱に歸たのは六月十日前の頃であつたが其時に面白い話がある戦争の濟んだ後で彼の旗艦に命中した破裂弾の碎片を見て船中の英人等が頻りに語り

合ふにこんな彈丸が日本で出來る譯はないイヤ能く見れば露西亞製のものぢや露西亞から日本に送つたのであらうなど、評議區々なりしと云ふ當時クリミア戦争の當分ではあるし元來英吉利と露西亞との間柄は犬と猿のやうで相互に色々な猜疑心がある今日に至るまでも仲は好くないやうに見える

それは扱置き茲に薩摩の船を二艘此方に引張て來ると云ふ時に其船長の松木弘安後に寺嶋陶藏又後に宗則五代才助後に五代友厚の兩人が船奉行と云ふ名義で云はゞ船長であるソコで英の軍艦が二艘の船を引張て來やうと云ふ其時に乗込の水夫などは其處から上陸させたが船長二人だけは英艦の方に投じた投じたけれども自分の船から出るときに實は松木と五代と申し談じて竊に其船の火藥庫に導火を點けて置たから間もなく船は二艘とも焼けて仕舞た夫れは夫れとして

扱松木に五代と云ふものは捕虜でもなければ御客でもない何しろ英の軍艦に乗込んで横濱に來たに違はない其事は横濱の新聞紙にも出て居たのであるがソレ切り少しも消息が分らない私は其前年松木と歐羅巴に一緒に行たのみならず以前から私と箕作と松木と云ふものは甚だ親しい朋友の間柄でソコで松木が英船に乗たと云ふが如何したらうかと只其噂をするばかりで尋ねる所もない英人が若し此兩人を薩摩の方へ還せばソリヤもう若武者共が直ぐに殺すに極て居る然ればと云て之を幕府の方に渡せば殺さぬまでもマア嫌疑の筋があるとか取調べる廉があるとか云て取敢へず牢には入れるだらう所が今日まで薩摩に還したと云ふ沙汰もなければ幕府に引渡したと云ふ様子もない如何したらうか如何にも不審な事ぢやと唯箕作と私と始終その話をして居た所が凡そ此事が濟んで一年ばかり経てから不意と

其松木を見付け出したこそ不思議の因縁である松木の話は次にして置いて横濱に英吉利の軍艦が歸て來た跡で薩摩から談判の爲めに江戸に人が出て來た其江戸に人の出て來たと云ふのは岩下佐治右衛門重野厚之丞(後に安釋)其外に黒幕見たやうな役目を帯びて來たのが大久保市藏(後に利通)其三人が出て來た處で第一番に薩摩の望む所は兎にも角にも此戦争を暫く延引して貰ひたいと云ふ注文なれども其周旋を誰に頼むと云ふ手掛りもなく當惑の折柄こゝに一人の人がある其一人と云ふのは清水卯三郎(瑞穂屋卯三郎)と云ふ人で此人は商人ではあるけれども英書も少し讀み西洋の事に付ては至極熱心先づ當時に於ては其身分に不似合な有志者である初め英艦が薩摩に行かうと云ふときに若し薩摩の方から日本文の書翰を出されたときには之を讀むに困る通辯にはアレキサンドル・シーボルトがあるから差支ない

けれども日本文の書翰を颯々と讀む人がないと云ふので英人から同行を頼まれた清水は平生勇氣もあり随分そんな事の好きな人で夫れは面白い行て見やうと容易承諾し横濱税關の免狀を申受けて旗艦に乗込み先方に着して親しく戦争をも見物した其縁があるので今度薩州の人が江戸に来て英人との談判に付き黒幕の大久保市藏は取敢へず清水卯三郎を頼み兎に角に此戦争を暫く延引して貰ひたいと云ふ事を在横濱の英公使ジョンニールに掛合ふことにしたソコデ清水は大久保の依託を受けて横濱の英公使館に出掛けて其話を申込んだ所が取次の者の言ふに斯る重大事件を談ずるに商人などでは不都合なりモット大きな人が來たら宜からうと云ふから清水は之を押し返し人に大小輕重はない談判の委任を受けて居れば澤山だ夫れでも拙者と話は出來ないかと少しく理屈を云た所がさう云ふ譯けなら直ぐ

に遇ふと云ふので夫れから公使に面會して戦争中止の事を話掛けるとなか／＼聞きさうにも爲ないイヤもう既に印度洋から軍艦を増發して何千の兵士は唯今仕度最中然るに此戦争の時期を延して待つなどとは謂れない話だ云々と思ふさま威嚇して聞きさうな顔色がなソコデ清水は其挨拶を承つて薩人に報告すると重野が逆もこりや六かしさうだ兎に角に自分達が自から談判して見やうと云て遂に薩英談判會を開き種々様々問答の末とう／＼要求通りの償金を拂ふ事になり高は二萬五千磅時の相場にして凡そ七萬兩ぐらゐに當り其七萬兩の金は内實幕府から借用してさうして島津薩摩守の名義では拂はれないと云ふので分家の島津淡路守の名を以て金を渡すことにして且つ又リチャルドソンを殺した罪人は何分にも何處にか逃げて分らないから若し分たらば死刑と云ふことで以て事が收まつた其談判

の席には大久保市藏は出ない岩下と重野の兩人それから幕府の外國方から鵜飼彌市監察方から齋藤金吾と云ふ人が立會ひいよ／＼書面を取換して事のすつかり收まつたのが文久三年の十一月の朔日か二日頃であつた

扱夫れから私の氣になる松木即ち寺島の話は斯う云ふ次第である松木五代が薩摩の船から英の軍艦に乘移た所が清水が居たので松木も驚いた清水と云ふ男は以前江戸にて英書の不審を松木に聞いて居たこともある至極懇意な間柄で其清水が英の軍艦に居るから松木の驚くも無理はないイヤ如何して此處に居るか「お前さんは如何して又此處に來た」と云ふやうな譯けで大變好都合であつたソコデ横濱に來たけれども此儘に何時迄も此船の中に居られるものでないマア如何かして上陸したいと云ふ其事に付ては清水卯三郎が一切引受ける、それは

松木と五代は極々日蔭者で青天白日の身と云ふのは清水一人そこで清水が先づ横濱に上て夫れから亞米利加人のヴェンリトと云ふ人に其話をした所が如何でも周旋しやう兎に角に舢船に乗て神奈川の方に上る趣向に爲やう其船も何も世話をして遣らうと云ふことになつた所でアドミラルが如何云ふかソレに聞いて見なければならぬのでアドミラルに其事を話すと至極寛大で上陸差支なしと云ふのでソレカラ一切萬事清水とヴェンリトと謀し合せて落人兩人の者は夜分竊に其舢船に乗り移り神奈川以東の海岸から上る積りに用意した所が其時には横濱から江戸に來る街道一町か二町目毎に今の巡查交番所見たやうなものがつつと建て居て一人でも怪しいものは通行を咎めると云ふことになつて居るからなか／＼大小などを挾して行かれるものでないソコで大小も陣笠も一切の物はヴェンリトの家に預

けて丸で船頭か百姓のやうな風をして小舟に乗込み舟は段々東に下
 てとう／＼羽根田の濱から上陸してソレカラ道中は忍び忍んで江戸
 に這入るとした所でマダ幕府の探偵が甚だ恐ろしい只の宿屋には泊
 られないから江戸に這入たらば堀留の鈴木と云ふ船宿に清水が先へ
 行って待て居るから其處へ来いと云ふ約束がしてあるソコで兩人は夜
 中勝手も知れぬ海濱に上陸して探り／＼に江戸の方に向て足を進め
 る中に夜が明けて仕舞いコリヤ大變と夫れから駕籠に乗て面を隠し
 て堀留の船宿に来たのが其翌日の晝であつた清水は昨夜から待て居
 るので萬事の都合宜く其船宿に二晩寄に泊て夫れから清水の故郷武
 州埼玉郡羽生村まで二人を連れて来て其處も何だか氣味が悪いと云
 ふので又その清水の親類で奈良村に吉田一右衛門と云ふ人がある其
 別荘に移して此處は極淋しい處で見付かるやうな氣遣ひはないと安

心して二人とも收め込んで仕舞ひ五代は其後五六ヶ月して竊に長崎
 の方に行き松木は凡そ一年ばかりも其處に居る中に本藩の方でも松
 木の事を心頭に掛けて其所在を探索し大久保岩下重野を始めとして
 江戸の薩州屋敷には肥後七左衛門南部彌八など云ふ人が様々周旋の
 末これは清水卯三郎が知て居はしないかと思ひ付て清水の處に尋ね
 に来た所が清水はドウも怖くて云はれない不意と捕まへられて首を
 斬られるのではなからうかと思て眞實が吐かれない一應は唯知らぬ
 と答へたれども薩摩の方では中々疑て居る様子爾うかと思ふと時と
 しては幕府の方からも清水の家に尋ねに来るソコで清水も當惑して
 如何しやうとも考へが付かない殺さないなら早く出して遣りたいが
 殺すやうな事なら今まで助けて置たものだから出したくないと自分
 の思案に餘て夫れから江戸の洋學の大家川本幸民先生は松木の恩師

であるから此大先生の意見に任せやうと思て相談に行た所が先生の
 説にソリヤ出すが宜からう薩藩人が爾う云ふなら有のまゝに明して
 渡して遣るが宜からうマサカ殺しもしなからうと云ふのでソコで始
 めて決断して清水の方から薩人に通知して實は初めから何も斯も自
 分が世話をした事で一切知て居る早速御引渡し申すが只約束は決し
 て本人を殺さぬやうにと念を押してソコで松木が始めて薩人に面會
 して此時から松木弘安を改めて寺島陶藏と化けたのです右の一條は
 薩州の方でも甚だ秘密にして事實を知て居る者は藩中に唯七人しか
 ないと清水が聞たさうだが其七人とは多分大久保岩下などでせう
 其時は既に文久四年となり四年の何月かドウモ覺えない寒い時では
 なかつた夏か秋だと思ひますが或日肥後七左衛門が不意と私方に來
 て松木が居るが前の處に來ても差支はないかと云ふ私は實に驚い

た去年からモウ氣になつて居て箕作と遇ひさへすれば其噂をして居
 たが生きて居たか「確かに生きて居る」何處に居るか「江戸に居る兎に角
 に此處に來て宜いか」宜いとも大宜しだ何も憚ることはない少しも構
 はない直ぐに逢ひたいと云ふと其翌日松木が出て來た誠に冥土の人
 に遭たやうな氣がしてソレカラいろ／＼な話を聞て清水と一緒にな
 つたと云ふとも分れば何も箇も分て仕舞た其時私は新錢座に居まし
 たがマア久振りで飲食を共にして「何處に居るか」と聞けば白銀臺町に
 曹某と云ふ醫者がある其家は寺島の内君の里なので其縁で曹の家に
 潛んで居ると云ふ其日は先づ其儘分れて夫れから私は直ぐに箕作の
 處に事の次第を云て遣て箕作も直ぐ其翌日出て來て兩人同道して白
 銀の曹の家に行き三友團座晝から晩までいろ／＼な事を話す其中に
 例の慶島戦争の話などもあつて其戦争の事に就てはマダ／＼いろ／＼

面白い事があるけれども長くなるから此處で之を略し扱寺島の身の
 上は如何だと云ふに薩摩の方は大抵是れで宜しいがマダ幕府の意向
 が分らないけれども是れとても別段に幕府の罪人でもないから爾う
 恐れる事もない譯けソコで寺島は何をして喰て居るかと思ければ今は
 本藩の翻譯などして居ると云ふそれこれの話の中に寺島が云ふには
 モウ〜鐵砲は嫌だ〜今でも乃公は鐵砲の音がドーンと鳴ると頭
 の中がズーンとして来るモウ嫌だぜ〜乃公は思ひ出しても身がブ
 ル〜ツとする夫れから又其船の火薬庫に導火を點けるときは随分
 氣味の悪い話だつただが命拾ひをした其時懷中に金が二十五兩あつ
 たから其金を持って上陸したと云ふいろ〜の話の中に英人が薩摩灣
 に碇泊中果物が欲しいと云ふと薩摩人が之を進上する風をして其機
 に乗じて斬込まうとして出来なかつたと云ふやうな種々様々な話が

ありますがそれはマア止めにして鐵の話

其鐵を切たと云ふことは清水卯三郎が船に乗て見て居たばかりで薩
 摩の人は多分知らないソレカラ清水が薩摩の人に遇て那の時に英艦
 の方では鐵を切たのだから拾ひ擧げて置たら宜からうと云た所が薩
 摩でも餘り氣に留めなかつたと見えて其鐵は何でも漁夫が擧げたと
 云ふ話だソレで鐵は薩摩の手に這入たが二萬五千磅の金を渡して和
 睦をした其時に英人が手輕に鐵を還して貰ひたいと云ふと易い事だ
 と云て何とも思はずに古鐵でも渡す積りで返して仕舞た様子だが前
 にも云ふ通り戦争の負勝は分らなかつたのでせう何方が勝たでもな
 い鐵を切て將官が二人死んで水兵は上陸も出來ずに歸たと云へばマ
 ア負師夫れから又薩摩の方も陸を荒されて居ながら歸て行く船を追
 蒐けて行くこともせず打遣て置たのみならず戦争の翌朝英艦から陸

に向て發砲しても陸から應砲もせぬと云へばこりや薩摩の負師のやうに當る勝たと云へば何方も勝た負けたと云へば何方も負けた詰り勝負なしとした所で何でも錨と云ふものは大事な物であるソレを浮かくと還して仕舞たと云ふのは誠に馬鹿げた話だけれども當時の日本人が國際法と云ふことを知らないのはマア此位なもので加之ならず本來今度の生麥事件で英國が一人殺人の爲めに大層な事を日本政府に云掛けて到頭十二萬五千磅取たと云ふのは理か非か甚だ疑はしい三十餘年前の時節柄とは云へ吾々日本人は今日に至るまでも不平である夫れから薩摩から戦の日延べを云出した其時に英公使の云振りが威嚇したにも威嚇さぬにもマア大變な劍幕で悪く云へば日本人は其威嚇を喰たやうなもので必竟何も知らずに夢中で此事が終て仕舞た今ならばこんな馬鹿げた事は勿論なからうが既に其時にも

亞米利加人などは日本政府で拂はなければ宜いがと云て居たことがある英公使は威嚇し抜て其上に佛蘭西のミニストルなどが横合から出て威張るなんと云ふのは丸で狂氣の沙汰で譯けが分らないソレで事が済んだのは今更ら何とも評論のしやうがない所で京都の方では愈よ五月十日(文久三年)が攘夷の期限だと云ふソレで和蘭の商船が下ノ關を通ると下ノ關から鐵砲を打掛けたけれども幸に和蘭船は沈みもせずに通たがソレがなか／＼大騒ぎになつて世の中は益々恐ろしい事になつて來た所で其歳の六月十日に緒方洪庵先生の不幸その前から江戸に出て來て下谷に居た緒方先生が急病で大層吐血したと云ふ急使に私は實に膽を潰した其二三日前に先生の處へ行ってチャント様子を知て居るのに急病とは何事であらうと取るものも取敢へず即刻宅を駈出して其時分には人力車も何もありません

ないから新錢座から下谷まで駈詰で緒方の内に飛込んだ所がもう緯切れて仕舞た跡是れはマア如何したら宜からうかと丸で夢を見たやうな譯け道の近い門人共は疾く先に來て後から來る者も多い三十人も五十人も詰掛けて外に用事もなし今夜は先づお通夜として皆起きて居る所が狭い家だから大勢坐る處もないやうな次第で其時は恐ろしい暑い時節で坐敷から玄關から臺所まで一杯人が詰めて私は夜半玄關の敷臺の處に腰を掛けて居たら其時に村田藏六(後に大村益次郎)が私の隣に來て居たから「オイ村田君——君は何時長州から歸て來たか此間歸た」ドウダエ馬關では大變な事を遣たぢやないか何をするのか氣狂共が呆返た話ぢやないかと云ふと村田が眼に角を立て「何だと遣たら如何だ」如何だッて此世の中に攘夷なんて丸で氣狂ひの沙汰ぢやないか「氣狂ひとは何だ怪しからん事を云ふな、長州ではチャント國是が

極まつてあるあんな奴原に我儘をされて堪るものか殊に和蘭の奴が何だ小さい癖に横風な面して居る之を打攘ふのは當然だモウ防長の士民は悉く死盡しても許しはせぬ何處までも遣るのだ」と云ふ其劍幕は以前の村田ではない實に思掛けない事では是れは變なことだ妙なことだと思ふたから私は宜加減に話を結んで夫れから箕作の處に來て大變だ——村田の劍幕は是れ——の話だ實に驚いたと云ふのは其前から村田が長州に行たと云ふことを聞いて朋友は皆心配してあの攘夷の眞盛り村田が其中に呼込まれては身が危いどうか怪我のないやうにしたいものだと思ふと觸ると噂をして居る其處に本人の村田の話を見て見れば今の次第實に譯けが分らぬ一體村田は長州に行て如何にも怖いと云ふことを知てさうして攘夷の假面を冠て態とりきんで居るのだらうか本心からあんな馬鹿を云ふ氣遣はあるまいどう

も彼の氣が知れないさうだ實に分らない事だ兎にも角にも一切彼の男の相手になるな下手な事を云ふとどんな間違ひになるか知れぬから暫く別ものにして置くが宜い」と箕作と私と二人云合して夫れから外の朋友にも村田は變だ滅多な事を云ふな何をするか知れないからと氣を付けた是れが其時の實事談で今でも不審が晴れぬ當時村田は自身防禦の爲めに攘夷の假面を冠て居たのか又は長州に行てどうせ毒を舐めれば皿までと云ふやうな譯けで本當に攘夷主義になつたのか分りませぬが何しろ私を始め箕作秋坪其外の者は一時彼に驚かされて其儘ソーツと棄置たことがあります

文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で日本では攘夷をすると云ひ又英の軍艦は生麥一件に就て大造な償金を申出して幕府に迫ると云ふ外交の難局と云ふたらば恐ろしい怖い事であつた其時に私は幕府の外

務省の翻譯局に居たから其外國との往復書翰は皆見て悉く知て居る即ち英佛其他の國々から斯う云ふ書翰が來たソレに對して幕府から斯う返辭を遣た又此方から斯う云ふ事を諸外國の公使に掛合付けると彼方から斯う返答して來たと云ふ次第即ち外交秘密が明に分て居なければならぬ筈勿論其外交秘密の書翰を宅に持つて歸ることは出來ないけれども役所に出て翻譯するか或は又外國奉行の宅に行て翻譯するときに私はちやんとソレを諳記して置て宅に歸てから其大意を書て置く例へば生麥の一件に就て英の公使から來た其書翰の大意は斯様々々ソレに向て此方から斯う返辭を遣はしたと云ふ其大意一切外交上往復した書翰の大意を宅に歸ては薄葉の野紙に書記して置たソレは勿論ザラに人に見せられるものでない唯親友間の話の種にする位の事にして置たが随分面白いものである所が私は其書付を一日

不意と焼て仕舞た、焼て仕舞たと云ふことに就て話がある其時に何とも云はれぬ恐ろしい事が起たと云ふのは神奈川奉行組頭今で云へば次官と云ふやうな役で脇屋卯三郎と云ふ人があつた其人は次官であるから随分身分のある人で其人の親類が長州に在て之に手紙を遣たる所が其手紙を不意と探偵に取られた其手紙は普通の親類に遣る手紙であるから何でもない事で其文句の中に誠に穩かならぬ御時節柄で心配の事だ、どうか明君賢相が出て来て何とか始末をしなければならぬ云々と書てあつた、ソコで幕府の役人が此手紙を見て何々天下が騒騒敷い、ドウカ明君が出て始末を付けて貰ふやうにしたいと云へば是れは公方様を蔑ろにしたものだ即ち公方様を無きものにして明君を欲すると云ふ所謂謀反人だと云ふ説になつて直ぐに脇屋を幕府の城中で捕縛して仕舞た、丁度私が城中の外務省に出て居た日で大變だ今

脇屋が捕縛されたと云ふ中に縛られては居ないが同心を見たやうな者が付て脇屋が廊下を通して行た何れも皆驚いて神奈川の組頭が捕まへられたと云ふは何事だと云て其翌日になつて聞た所が今の手紙の一件で斯うく云ふ嫌疑ださうだと云ふ夫れから脇屋を捕まへると同時に家捜しをしてさうして其儘當人は傳馬町に入牢を申付けられ何かタワイもない吟味の末牢中で切腹を申付られた其時に檢視に行た高松彦三郎と云ふ人は御小人目付で私の知人だ傳馬町へ檢視には行たが誠に氣の毒であつたと後で彦三郎が私に話しましたソコで私も脇屋卯三郎がいよく殺されたと云ふことを聞いて酷く恐れた其恐れたと云ふのは外ではない明君云々と云た丈けの話で彼が傳馬町の牢に入れられて殺されて仕舞た爾うすると私の書記して置たものは外交の機密に係る恐ろしいものである若しこれが分りでもすれば直

ぐに牢に打込まれて首を斬られて仕舞ふに違ひないと斯う思たから
 其時は私は鐵砲洲に居たが早々其書付を焼て仕舞たけれども何分氣
 になつて堪らぬと云ふのは私が其書付の寫しか何かを親類の者に遣
 たことがある夫れから又肥後の細川藩の人にソレを貸したことがあ
 る貸した其時にアレを寫しはしなかつたらうかと如何も氣になつて
 堪らないと云て今頃からソレを荒立て、聞きに遣れば又其手紙が邪
 魔になる既に原本は焼て仕舞たが其寫しなどが出て呉れなければ宜
 いが出て來られた日には大變な事になると思て誠に氣懸りであつた
 所が幸に何事もなく王政維新になつたので大きに安堵して今では颯
 々とそんな事を人に話したり此通りに速記することも出來るやうに
 なつたけれども幕府の末年には決して爾うでない自分から作つた災で
 文久三年亥歲から明治元年まで五六年の間と云ふものは時の政府に

對して恰も首の負債を背負ながら他人に言はれず家内にも語らず自
 分で自分の身を窘めて居たのは随分悪い心持でした脇屋の罪に較べ
 て五十歩百歩でない外交機密を漏した奴の方が餘程の重罪なるに其
 罪の重い方は旨く免かれて何でもない親類に文通した者は首を取ら
 れたこそ氣の毒ではないか無慘ではないか人間の幸不幸は何處に在
 るか分らない所謂因縁でせう此一事でも王政維新は私の身の爲めに
 有難い夫れは扱置き今日でも彼の書たものを見れば文久三年の事情
 はよく分て外交歴史の材料にもなり頗る面白いものであるが何分に
 も首には易へられず焼て仕舞たが若しも今の世の中に誰か持て居る
 人があるなら見たいものと思ひます
 夫れから世の中はもう引續いて攘夷論ばかり長州の下ノ關では只和
 蘭船を撃つばかりでなく其後亞米利加の軍艦にも發砲すれば英吉利

の軍艦にも發砲すると云ふやうな譯けで到頭その尻と云ふものは英
 佛蘭米四ヶ國から幕府に振込んで三百萬圓の償金を出せと云ふこと
 になつて捫着の末遂に其償金を拂ふことになつたけれども國內の攘
 夷論はなか／＼收まりが付かないで到頭仕舞には鎖國攘夷と云ふこ
 とを云はずに新に鎖港と云ふ名を案じ出してソレで幕府から態々池
 田播磨守と云ふ外國奉行を使節として佛蘭西まで鎖港の談判に遣は
 すと云ふやうな騒ぎで一切滅茶苦茶暗殺は殆んど毎日の如く實に恐
 ろしい世の中になつて仕舞た爾う云ふ時勢であるから私は唯一身を
 慎んでドウでもして災を遁れさへすれば宜いと云ふことに心掛けて
 居ました兎に角に癸亥の前後と云ふものは世の中は唯無闇に武張る
 ばかり其武張ると云ふのも自から由來がある徳川政府は行政外交の
 局に當て居るから據るなく開港説——開國論を云はなければならぬ

又行はなければならぬけれども其幕臣全體の有様はドウだと云ふと
 ソリヤ鎖國家の巢窟と云ても宜い有様で四面八方ドツチを見ても洋學
 者などの頭を擡げる時代でない當時少しく世間に向くやうな人間は
 悉く長大小を横へる、夫れから江戸市中の劍術家は幕府に召出されて
 巾を利かせて劍術大流行の世の中になると其風は八方に傳染して坊
 主までも體度を改めて來た元來其坊主と云ふものは城内に出仕して
 大名旗本の給仕役を勤める所謂茶道坊主であるから平生は短い脇差
 を挟して大名に貰た縮緬の羽織を着てチヨ／＼歩くと云ふのが是
 れが坊主の本分であるのに世間が武張ると此茶道坊主までが妙な風
 になつて長い脇差を挟して坊主頭を振り立てゝ居る奴がある又當時
 流行の羽織はどうだと云ふと御家人旗本の間には黃平の羽織に漆紋
 それは昔しく家康公が關ヶ原合戦の時に着て夫れから水戸の老公

が始終ソレを召して居たとかと云ふやうな云傳へでソレが武家社會一面の大流行ソレカラ江戸市中七夕の飾りには笹に短冊を付けて西瓜の切とか瓜の張子とか團扇とか云ふものを吊すのが江戸の風である所が武道一偏攘夷の世の中であるから張子の太刀とか兜とか云ふやうなものも吊すやうになつて全體の人氣がすつかり昔の武士風になつて仕舞た逆も是れでは寄付きやうがないソコで私は只獨りの身を慎むと同時に是れはドウしたつて刀は要らない馬鹿々々しい刀は賣つて仕舞へと決斷して私の處にはそんなに大小などは大層もありはしないがソレでも五本や十本はあつたと思ふ神明前の田中重兵衛と云ふ刀屋を呼んで悉く賣拂つて仕舞たけれども其時分はマダ双刀を挾さなければならぬ時であるから私の父の挾して居た小刀即ち社袴を着るとき挾す脇差の鞘を少し長くして刀に仕立

て夫れから神明前の金物屋で小刀を買つて短刀作りにつけて唯印し丈の脇差に挾すことにしてアトは残らず賣拂つて其代金は何でも二度に六七十兩請取たことは今でも覚えて居る即ち家に傳はる長い脇差の刀に化けたのが一本小刀で拵へた短い脇差が一本それ切で外には何もないさうして小さくなつて居るばかり私は少年の時から大阪の緒方の塾に居るときも戯に居合を抜て随分好きであつたけれども世の中に武藝の話が流行すると同時に居合刀はすつかり奥に仕舞ひ込んで刀なんぞは生れてから挾すばかりで抜たこともなければ抜く法も知らぬと云ふやうな風をして唯用心に用心して夜分は決して外に出ず凡そ文久年間から明治五六年まで十三年の間と云ふものは夜分外出したことはない其間の仕事は何だと云ふと唯著書翻譯にのみ屈託して歲月を送つて居ました。

再度米國行

夫から慶應三年になつて又私は亞米利加に行つた是れで三度目の外國行、慶應三年の正月二十三日に横濱を出帆して今度の亞米利加行に就ても亦なか／＼話がある、と云ふのは先年亞米利加の公使ロペルトエーチ プラインと云ふ人が来て居て其時に幕府で軍艦を拵へなければならぬと云ふとで亞米利加の公使に其買入方を頼んで數度に渡した其金高は八十萬弗さうして追々に其軍艦が出来て来る筈ソレで文久三四年の頃富士山と云ふ船が一艘出来て来て其價は四十萬弗所が其後幕府はなか／＼な混雜、又亞米利加にも南北戦争と云ふ内亂が起つたと云ふやうな譯で其後一向便りもない何しろ金は八十萬弗渡した其中で四十萬弗の船が来た丈けで其後は何も來ない左りとは埒が

明かぬからアトの軍艦は此方から行つて請取らう其序に鐵砲も買つて來やうと云ふやうな事で其時派遣の委員長に命ぜられたのは小野友五郎、此人は御勘定吟味役と云ふ役目で御勘定奉行の次席なか／＼時の政府に於ては權力もあり地位も高い役人である其人が委員長を命ぜられて其副長には松本壽太夫と云ふ人が命ぜられたと云ふことは其前年の冬に定まつた夫れから私もモウ一度行つて見たいものだと思つて小野の家に度々行つて頼んだ何卒一緒に連れて行つて呉れないかと云た所が連れて行かうと云ふことになつて私は小野に隨從して行くことになりました其外同行の人は船を請取るのですから海軍の人も兩人ばかり又通辯の人も行きました此時には亞米利加と日本との間に太平洋の郵便船が始めて開通した其歳で第一着に日本に來たのがコ罗拉ドと云ふ船で其船に乗込む前年亞米利加に行つた時には小さな船で

海上三十七日も掛たと云ふのが今度のコロラドは四千噸の飛脚船
中の一切萬事實に極樂世界で廿二日目に桑港に着た着たけれども
今とは違て其時分はマダ鐵道のないときでバナマに廻らなければな
らぬから桑港に二週間ばかり逗留して其處で太平洋汽船會社の別
の船に乗替へてバナマに行て蒸氣車に乗てあの地峽を踰えて向側に
出て又船に乗て丁度三月十九日に紐育に着き華聖頓に落付て取敢へ
ず亞米利加の國務卿に遇ふて例の金の話を始めた其時の始末でも幕
府の模様が能く分る此方を出立する時から先方の談判には八十萬弗
渡したと云ふ請取がなければならぬと云ふことは能く分て居る所が
どうも丸で一才とした紙切に十萬とか五萬とか書てあるものが何で
も十枚もある其中には而かも三角の紙切に僅に何萬弗請取りと記し
て唯プラインと云ふ名ばかり書てあるのが何枚もある何の爲めにど

うして請取たと云ふ約定もなければ何にもない只金を請取たと云ふ
丈の印ばかりである代言流義に行けば誠に薄弱な殆んど無證據と
云ても宜い位ソコで其事に就ては出發前に随分議論しました却て是
れが宜しい此方では一切萬事亞米利加の公使と云ふものを信じ拔て
イヤ亞米利加の公使を信じたのではない日本の政府が亞米利加の政
府を信じたのだ書付も要らなければ條約も要らない只口で請取たら
請取たと云ふた丈で澤山だ是れは只覺書に數を記した丈の事固
よりこんな物は證據にしないと云ふ風に出やうと相談を極めて彼方
へ行てから其話に及ぶと直ぐに前の公使プラインが出て來た出て來
て何とも云はないドウですか船を渡すなり金を渡すなりドウでも宜
いと文句なしに立派に出掛けて來た先づ是れで安心であるとした所
で此方では軍艦一艘欲しい夫れから諸方の軍艦を見て廻て是れが宜

からうと云てストーンウオールと云ふ船ソレが日本に来て東艦となりましたらう此甲鐵艦を買ふことにして其外小銃何百挺か何千挺か買入れたけれどもソレでもマダ金が彼方に七八萬弗残て居る是れは亞米利加の政府に預けて置いて其船を廻航するに付て私共は先に歸たが海軍省から行た人はアトに残てさうして亞米利加の船長を一人雇ふて此方に廻航することになつて夫れで事が濟んだ丁度船の日本に着たのは王政維新の明治政府になつてから即ち明治元年であるが其事に就て當時會計を司つて居た由利公正さんに遇て後に聞た所がドウもあの時金を拂ふには誠に困た明治政府には金がない如何やら斯うやらヤット何十萬弗拵へて拂たと云ふ話を私が聞てソレは大間違ひだマダ幾らか金が餘て彼方に預けてある筈だと云ふたら爾うかと云つて由利は大造驚いて居ました何處にドウなつたか二重に金を拂

たことがある亞米利加人が取る譯けはない何處かに舞込んで仕舞たに違ひない

それは扱置き私の一身に就て其時甚だ穩かならぬ事があつたと云ふのは私は幕府の用をして居るけれども如何なことを幕府を佐けなければならぬとか云ふやうな事を考へたことがない私の主義にすれば第一鎖國が嫌ひ古風の門閥無理壓制が大嫌ひで何でも此主義に背く者は皆敵のやうに思ふから此方が思ふ通りに先方の鎖國家古風家も亦洋學者を外道のやうに惡むだらう所で私が幕府の様子を見るに全く古風の其まゝで少しも開國主義と思はれない自由主義と見えない例へば年來政府の御用達は三井八郎右衛門で政府の用を聞くのみならず役人等の私用をも周旋するの慣行でしたソコで今度の米國行に付ても役人が幕府から手當の金を一步銀で請取れば亞米利加に行く

きには之を洋銀の弗に替へなければならぬ然るに其時は弗相場の日變化する最中で兩替が甚だ面倒であるスルト一行中の或る役人が三井の手代を横濱の旅館に呼出し色々弗の相場を聞糺して扱云ふやう成程昨今の弗は安くはない併し三井にはズット其前安い時に買入れた弗もあるだらう拙者の此一步銀は其安い弗と兩替して貰ひたいと云ふと三井の手代は平伏して畏りましたお安い弗と兩替いたしませうと云て幾らか割合を安くして弗を持って來た私は傍に居て此様子を見て居てドウモ無鐵砲な事を言ふ奴だ金の兩替をするに安いときに買入れた金と云てドウ云ふ印があるか安いも高いも其日の相場に定まつたものを夫れを相場外れにせよと云ひながら愧る氣色もなく平氣な顔をして居るのみならず其人の平生も賤しからぬ立派な士君子であるとは驚いた又三井の手代も算盤を知るまいことかチャント知

て居ながら平氣で損をして何とも云はぬ畢竟人の罪でない時の氣風の然らしむる所腐敗の極度だこんな政府の立行かう筈はないと思たことがある夫れから私共が亞米利加に行つた所で其時に日本は國事多端の折柄徳川政府の方針に萬事儉約は勿論假令政府であらうとも利益あることには着手せねばならぬと云ふので其掛の役人を命じて御國益掛と云ふものが出來た種々様々な新工夫の新策を奉る者があればソレを政府に採用しているく／＼な工夫をする例へば江戸市中の何處の所に掘割をして通船の運上を取るが宜しいと云ふ者もあり又或は新川に這入る酒に税を課したら宜からうとか何處の原野の開墾を引受けてソレで幾らかの運上を納めやうと云ふ者もあり又或る時江戸市中の下肥を一手に任せて其利益を政府に占めやうではないかと云ふ説が起つたスルト或る洋學者が大に氣焰を吐て政府が差配人を

無視して下肥の利を専らにせんとは是れは所謂壓制政府である昔し
 亞米利加國民は其本國英の政府より輸入の茶に課税したるを憤
 り貴婦人達は一切茶を喫ずして茶話會の樂しみをも廢したと云ふこ
 とを聞た左れば吾々も此度は米國人の擧に倣ひ一切上園を廢して政
 府を困らして遣らうではないか此發案の可否如何とて一座大笑を催
 したことがある政府の事情が凡そ斯う云ふ風であるから今度の一行
 中にも例の御國益掛の人が居て其人の腹案に今後日本にも次第に洋
 學が開けて原書の價は次第に高くなるに違ひない依て今この原書を
 買って持て歸て賣たら何分かの御國益にならうと云ふので私に其買入
 方を内命したから私が容易に承知しない原書買入は甚だ宜しい日本
 には原書が拂底であるから一冊でも餘計に輸入したいと思ふ所に幸
 なる哉今度米國に來て官金を以て澤山に買入れ日本に持て歸て原價

でドシ／＼賣て遣らう左様なれば誠に難有い如何やうにも勉強して
 安いもの適當なものを買入れやう此儀は如何で御座ると尋ればイヤ
 左様でない自から御國益にする積りだと云ふ左すれば政府は商賣を
 するのだ私は商賣の幸取りをする爲めに來たのではないけれども政
 府が既に商賣をすると切て出れば私も商人になりませう左る代りに
 コンミツション(手数料)を思ふさま取るがドウだ何れでも宜しい政府
 が買た儘の價で賣て呉れると云へば私はどんなにでも骨を折て本を
 吟味して値切り値切て安く買ふて賣て遣るやうにするが政府が儲け
 ると云へば政府にばかり儲けさせない私も一緒に儲けるサア爰が官
 商分れ目だ如何で御座ると振り込んで大變喧しい事になつて大に重
 役の歡心を失ふて仕舞たが今日より考へれば事の是非に拘はらず隨
 行の身分にして甚だ宜くない事だと思ひます

夫れから又斯う云ふ事がある同行の尺振八など、飲みながら壯語快談ソリヤもう官費の酒だから船中の事で安くはないが何に構ふものかドシ／＼飲み次第喰ひ次第で颯々と酒を注文して部屋に取て飲むサアそれからいろ／＼な事を語出してドウしたつて此幕府と云ふものは潰さなくてはならぬ抑も今の幕政の様を見る政府の御用と云へば何品を買ふにも御用だ酒や魚を買ふにも自分で勝手な値を付けて買て居るではないか上総房州から船が這入ると幕府の御用だと云て一番先に其魚を只持て行くやうなことをして居るソレも將軍様が喰ふならばマア宜いとするが爾うではない料理人とか云ふやうな奴が只取て来て其魚を又賣て居るではないか此一事推して他を知るべし、實に鼻持のならぬ政府だソレも宜いとして置いて此攘夷はドウだ自分が其局に當て居るから據ろなく澁々開國論を唱へて居ながら其實を

叩いて見ると攘夷論の張本だ彼の品川の海鼠臺場マダあれでも足りないかと云て拵へ掛けて居るではないか夫れから又勝麟太郎が兵庫に行て七輪見たやうな丸い白い臺場を築くなんて何だ攘夷の用意をするのではないかそんな政府なら叩き潰して仕舞ふが宜いぢやないかと云ふと尺振八が爾うだ其通りに違ひないけれども斯うして船に乗て亞米利加に往來するのも幕府から入用を出して居ればこそだ御同前に喰て居るものも着て居るものも幕府の物ではないか夫れを衣食して居ながらソレを潰すと云ふのは何だか少し氣に濟まないやうではないかそれは構はぬ御同前に此身等が政府の御用をすると云ふのは何も人物がエライと云て用ひられて居るのではない是れは横文字を知て居るからと云ふに過ぎない之を喩へば革細工だから穢多にさせるると云ふと同じ事でマア御同前は雪駄直しを見たやうな者だ幕府

の殿様方は汚い事が出来ない幸ひ此處に革細工をする奴が居るからソレにさせろと云ふのでデイ／＼が大きな屋敷の御出入になつたのと少しも變つたことはないソレに遠慮會釋も絲瓜も要るものか蠅々と打毀して遣れ只此處で困るのは誰が之を打毀すかソレに當惑して居る乃公等は自分で其先棒にならうとは思はぬ誰が之を打毀すか之が大問題である今の世間を見るに之を毀さうと云て騒いで居るのは所謂浮浪の徒即ち長州とか薩州とか云ふ攘夷藩の浪人共であるが若しも彼の浪人共が天下を自由にするやうになつたらソレこそ徳川政府の攘夷の上塗りをする奴ぢやないかソレよりもマダ今の幕府の方が勝しだけれども如何したつて幕府は早晚倒さなければならぬ唯差當り倒す人間がないから仕方なしに見て居るのだ困話ではないかなど、且つ飲み且つ語り部屋の中とは云ひながら人の出入りを止め

るでもなし傍若無人、大きな聲でドシ／＼論じて居たのだから爾う云ふやうな話もチラホラ重役の耳に聞えたことがあるに違ひないサア夫れから江戸に歸た所が前にも云ふ通り私は幕府の外務省に出て翻譯をして居たのであるが外國奉行から咎められたドウも貴様は亞米利加行の御用中不都合があるから引込んで謹慎せよと云ふ勿論幕府の引込めと云ふのは誠に樂なもので外に出るのは一向構はぬ只役所に出さへしなれば宜しいのであるから一身の爲めには何ともない却て暇になつて有難い位のことだから命令の通り直ぐ引込んで其時に西洋旅案内と云ふ本を書いて居ました亞米利加から歸て日本に着たのは其歳の六月下旬天下の形勢は次第に切迫してなかく、喧しい私は唯家に引籠て生徒に教へたり著書翻譯したりして何も騒ぎはしないが世間ではいろ／＼な評判をして居

る段々聞くと福澤の實兄は鹿兒島に行て居るとか何とか云ふ途方もない評判をして居る兄が薩藩に與みして居るから弟も變だと云ふのは私が動もすれば幕府の攘夷論を冷評してこんな政府は潰すが宜い杯云ふから自からそんな評判も立つのであらうが何は扱置き十餘年前に此世を去た兄が鹿兒島に居る譯けもなし俗世界の流言として聊か辯解もせず又幕府に對しても所謂有志者中には種々様々の奇策妙案を建言する者が多い様子なれども私は一切關係せず唯獨り世の中を眺めて居る中に段々時勢が切迫して來て或日中嶋三郎助と云ふ人が私の處に來て「ドウして引込んで居るか」斯うく云ふ次第で引込んで居る「ソリヤアどうも飛んだ事だ此忙しい世の中にお前達が引込んで居ると云ふことがあるか直ぐ出る」出るツたつて出さぬものを出られないぢやないか「宜しい拙者がすぐに出して遣ると云て夫れから其時

に稻葉美濃守と云ふ老中があつてソコへ中嶋が行て福澤を引込ましめて置かないで出すやうにしたら宜からうと云ふやうな事になつて夫れから再び出ることになつた其美濃守と云ふのは舊淀藩主で今日は箱根塔澤に隱居して居るあの老爺さんのことで中嶋三郎助は舊浦賀の與力箱館の戦争に父子共に討死した立派な武士で其碑は今浦賀の公園に立てある

全體今度の亞米利加行に就て斯く私が攪斥されたと云ふのは何か私に獨り宜いやうにあるけれども實を申せば左様でない、と云ふのは元と私は亞米利加に行きたいと云て小野友五郎に頼み同人の信用を得て隨行員となつた一人であれば一切萬事長者の命令に従ひ其思ふ通りの事をしなければ濟まない譯けだ所が實際は爾うでなく始終逆らふやうな事をするのみか明に命令に背いたこともある例へば彼

の在留中小野も立腹したと見え私に向て最早や御用も済みたればお前は今から先きに歸國するが宜しいと云ふと私が不服だ此處まで連れて来て散々御用を勤めさせて用が少なくなつたからと云て途中で歸れと云ふ権力は長官にもなからう私は日本を出るとき閣老にお暇乞をして出て来た者である早く云へば御老中から云付けられて来たのだお前さんが歸れと云ても私は歸らないとリキンダのは私の方が無法であらう又或日食事の時に私が何か話の序に全體今の幕府の氣が知れない攘夷鎖港とは何の趣意だ之が爲めに品川の臺場の増築とは何の戯れだ其臺場を築いた者は此テーブルの中にも居るではないかこんな事で日本國が保てると思ふか日本は大切な國だぞなど公衆の前で公言したやうな事は私の方こそ氣違ひの沙汰である成程小野は頑固な人に違ひないけれども私の不從順と云ふことも十分であ

るから始終嫌はれたのは尤も至極少しも怨む所はない

王政維新

其歳も段々迫てとう／＼慶應三年の暮になつて世の中が物騒になつて来たから生徒も自然に其影響を蒙らなければならぬ國に歸るもあれば方々に行くもあると云ふやうな譯けで學生は次第々々に少くなると同時に今まで私の住で居た鐵砲洲の奥平の邸は外國人の居留地になるので幕府から上地を命ぜられ既に居留地になれば私も其處に居られなくなるソコで慶應三年十二月の押詰めに新錢座の有馬と云ふ大名の中屋敷を買受けて引移るや否や鐵砲洲は居留地になり明くれば慶應四年即ち明治元年の正月早々伏見の戦争が始まつて將軍慶喜公は江戸へ逃げて歸りサアそこで又大きな騒ぎになつて仕舞た即

ち是れが王政維新の始まり其時に私は少しも政治上に關係しない抑も王政維新が政治の始まりであるから話が少し前に戻つて長くなりますけれども一通り私が少年のときからの話をして政治に關係しない顛末を明にしなければならぬ

素と私は小士族の家に生れ其頃は封建時代の事で日本國中何れも同様の制度は守舊一偏の有様で藩士銘々の分限がチャント定まつて上士は上士下士は下士と箱に入れたやうにして其間に少しも融通があられないソコで上士族の家に生れた者は親も上士族であれば子も上士族百年経ても其分限は變らない從て小士族の家に生れた者は自から上流士族の者から常に輕蔑を受ける人々の智愚賢不肖に拘はらず上士は下士を目下に見下すと云ふ風が専ら行はれて私は少年の時からソレに就て如何にも不平で堪らない所が其不平の極は人から侮

辱される其侮辱の事柄を惡み遂には人を忘れて唯その事柄を見苦しきことと思ひ門閥の故を以て漫に威張るは男子の愧づ可き事である見苦しきことであると云ふ觀念を生じ例へば上士下士相對して上士が横風である私は之を見て其上士の傲慢無禮を憤ると同時に心の中では思直して此馬鹿者めが何も知らずに夢中に威張て居る見苦しい奴だと却て氣の毒に思ふて心中却て此方から輕蔑して居ました私が其時老成人であるか又は佛者であつたら人道世教の爲めに如何とか又は平等を愛して差別を排するとか何とか云ふ説もあらうが十歳以上十九か二十歳の少年にそんな六かしい奥ゆかしい考のある可き筈はない唯人間の殼威張は見苦しいものだ威張る奴は恥知らずの馬鹿だとばかり思て居たから夫れゆゑ藩中に居て人に輕蔑されても侮辱されても其立腹を他に移して他人を辱かしめると云ふとはドウして

も出来ない例へば私が小士族の身分で上流に對しては小さくなつて居なければならぬけれども順を云へば又私より以下の者が幾らもあるから其以下の者に向て自分が輕蔑された丈けソレ丈け輕蔑して遣れば所謂江戸の敵を長崎で討て勘定の立つやうなものだがソレが出来ない出来ない所ではない其反對に私は下の方に向て大變丁寧にして居ました是れは私獨りの發明でない私の父母共に爾う云ふ風があつたと推察が出来ます前にも云た通り私の父は勿論漢學者で身分は私と同じ事であるから定めて上流士族から蔑視されて居たでせう所が私の父は決して他人を輕蔑しない例へば江州水口の碩學中村栗園は父の實弟のやうに親しくして居ましたが元來栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で所謂素町人の子だから藩中士族は誰も相手にならないけれども私の父は其人物を愛して身分の相違を問はず

大層丁寧に取扱ふて大阪の倉屋敷の家に寄寓させて尙ほ種々に周旋してとう／＼水口の儒者になるやうに取持ち其間柄と云ふものは眞に骨肉の兄弟にも劣らず父の死後私の代になつて栗園先生は福澤の家を第二の實家のやうな鹽梅にして死ぬまで交際して居ましたシテ見ると是れは決して私の發明でない父母から譲られた性質であると思ふソレで私は中津に居て上流士族から蔑視されて居ながら私の身分以下の藩士は勿論町人百姓に向ても假初にも横風に構へて其人々を目下に見下して威張るなど云ふことは一寸ともしたことがない勿論上の者に向て威張りたくも威張ることが出来ない出来ないので誰モウ觸らぬやうに相手にならぬやうと獨り自から安心決定して居る既に心に決定して居れば藩に居て功名心と云ふものは更らにない立身出世して高い身分になつて錦を故郷に着て人を驚かすと云ふや

うな野心は少しもないのみか私には其錦が却て恥かしくて着ることが出来ないグヅ云へば唯この藩を出て仕舞ふ丈けの事だと云ふのが若い時からの考へで人にこそ云はね私の心では眼中藩なしと斯う安心を極めて居ましたので夫れから長崎に行き大阪に出て修業して居る其中に藩の御用で江戸に呼ばれて藩中の子弟を教ふると云ふことをして居ながらも藩の政應に對しては誠に淡泊で長い歲月の間只の一度も建白なんと云ふことをしたことはない能く世間にある事でイヤどうも藩政を改革して洋學を盛にするが宜いとか兵制を改革するが宜いとか云ふことは書生の能く遣ることだけれども私に限り只の一度も云出したことがないソレと同時に自分の立身出世を藩に向て求めたことがない、ドウ云ふやうに身分を取立て、貰ひたい、ドウ云ふやうにして祿を増して貰ひたいと云ふやうな事は陰にも陽にも

どんな事があつても藩の長老に内願などしたことがないソコで江戸に參てからも本藩の様子を見れば種々な事を試みて居る兵制で申せば西洋流の操練を採用したことがあるけれども私はソレを宜いと云て譽めもしなければ悪いと云て止めたこともなし又或は大に漢學を盛にすると云て頻りに學校の改革などを企てたこともある或は兵制は甲州流が宜いと云て法螺の貝を吹て藩中で調練をしたこともあるソレも私は只目前に見て居るばかりで善いとも悪いとも一寸とも云たことがない或時に家老の隠居があつて大層政治論の好きな人で私が家老の家に行たらば其隠居がドウも公武の間が甚だ穩かでない全體どうも近衛様が爾うも有りさうもない事だとか或は江戸の御老中が詰らないとか云ふやうな慷慨談を頻りに云て居る爾う云はれると私も何か云ひさうな事だ所が私は決して云はない如何にも爾うでせ

うッリヤ成程近衛様も爾うだらう御老中も爾うだらうが扱ッレが實地になると傍觀者の思ふやうにはならぬもので近くは此奥平様の屋敷でもマダして宜いこともあるだらう爲なくて宜いこともあるだらう傍觀者から之を見たならば嘸堪へ難いことに思ふでありませうけれども當局の御家老の身になつて見れば又爾う思ふ通りに行かないもので矢張り今の通りより外に仕様がなない餘り人の事を批評しても詰らぬ事です私は一體そんな事に就ては何を議論しやうとも思はぬと云て少しも相手にならなかつた

爾う云ふ風に構へて一切政治の事に就て口を出さうと思はない思はないから奥平の邸で立身出世しやうとも思はない立身出世の野心がなければ人に依頼する必要もない眼中人もなければ藩もなし左ればとて藩の邪魔をしやうとも思はず唯屋敷の長屋を借りて安氣に住居

するばかり誠に淡泊なもので或時私が何かの事に就て御用があるから出て来いと云ふから上屋敷の御小納戸の處へ參た所が之を貴様に下さると云て奥平家の御紋の付て居る縮緬の羽織を呉れた即ち御紋服拜領だ左まで喜びもしなければ品物が粗末だと云て苦情も云はず只難有うございませすと云て拜領して其歸りに屋敷内に國から來て居る亡兄の朋友菅沼孫右衛門と云ふ人の勤番長屋に何か用があつて寄た所が其處に出入りの呉服屋か知らん古着屋か知らん呉服商人が來て何か話をして居るッレを聞て居ると羽織を拵へると云ふやうな様子、夫れから私が「ア、孫右衛門さん羽織をお拵へか」左様さ「爾うか羽織には宜い縮緬の賣物があるがお買ひなさらんか」爾うか「ソリヤ幸ひだが紋所は」紋所は御紋付だから誰にでも着られる羽織だがドウだ「ソリヤ宜い爾う云ふ賣物があるなら兎も角も見たいものだ」買ふと云ひな

されば此處に持て居る此羽織だがドウだ「成程御紋付だから差支ない
 買はう就ては此處に呉服屋が来て居るが價はドウだ」値は呉服屋に付
 けて貰へば宜いと云て夫れからどの位の價かと云たら「單羽織の事だ
 から一兩三分だ」と云ふスグ相談が出来て其羽織を賣て一兩三分の金
 を持て私は鐵砲洲の中屋敷に歸たことがあると云ふやうな次第で全
 體藩の一般の習慣にすれば拜領の御紋服と云ふものは其拜領した年
 月を系圖にまで認めて家の名譽にするると云ふ位のものなれども私は
 其御紋服の羽織を着ても着なくても何ともない夫れよりか金の方が
 宜い一兩三分あれば昨日見た彼の原書も買はれる原書を買はなけれ
 ば酒を飲むと云ふやうな至極無邪氣な事であつた
 爾う云ふ風であるから藩に對して甚だ淡泊淡泊と云へば言葉が宜い
 けれども同藩士族の眼から見れば不深切な薄情な奴と見えるも道理

で藩中の若い者等が酒席などで毎度議論を吹掛ることがある其時に
 私は答へて「不深切薄情と云ふけれども私は何も奥平様に向て悪い事
 をしたことはない一寸とでも藩政の邪魔をしたことはない只命令の
 儘に堅く守て居るのだ此上に深切と云てドウ云ふことをするのか私
 は厚かましい事は出来ない之を不深切と云へば仕方がない今も申す
 通り私は藩に向て悪い事をしないのみか一寸とでも求めたことがな
 からう或は身分を取立て呉れる祿を増して呉れると云ふやうな事は
 蔭にも日向にも一言でも云たことがあるか其言葉を聞た人が此藩中
 に在るかドウか御家老以下の役人に聞て見るが宜い厚かましく深切
 を盡して厚かましく泣付くと云ふことは自分の性質に於て出来ない
 是れで悪いと云ふならば追出すより外に仕方はあるまい追出せば謹
 んで命を奉じて出て行く丈けの話だ凡そ人間の交際は賣言葉に買言

葉で藩の方から數代御奉公を仰付けられて有難い仕合せであらうと酷く恩に被せれば失敬ながら此方にも言葉がある數代家來になつて正直に勤めたぞ、そんなに恩に被せなくても宜からうと云はねばならぬ之に反して藩の方から手前達のやうな家來が數代神妙に奉公して呉れたから此藩も行立つと斯ふ云へば此方も亦言葉を改め數代御恩を蒙て有難い仕合せに存じ奉ります累代の間には役に立たぬ子供もありました病人もありましたソレにも拘はらず下さる丈けの家祿はチャンと下さつて家族一同安樂に生活しました主恩海より深し山より高しと此方も小さくなつてお禮を申上げる是れが即ち賣言葉に買言葉だソレ丈けの事は私も能く知て居る爾う無闇に恩に被せる事ばかり云て只漠然と不深切と云ふやうな事を云て貰ひたくない云ふやうな調子で始終問答をして居ました

夫れから長州藩が穩かでない朝敵と銘が付てソコで將軍御親發となり又幕府から九州の諸大名にも長州に向て兵を出せと云ふ命令が下て豊前中津藩からも兵を出す、就ては江戸に留學して居る學生小幡篤次郎を始め十人も居ましたソレを出兵の御用だから歸れと云て呼還しに來た其時にも私は不承知だ此若い者が戦争に出るとは誠に危ない話で流丸に中ても死んで仕舞はなければならぬ、こんな分らない戦争に鐵砲を擔がせると云ふならば領分中の百姓に擔がせても同じ事だ此大事な留學生に歸て鐵砲を擔げなんてソレな不似合な事をするには及ばぬ假令ひ彈丸に中らないでも足に踏抜きしても損だ構ふこととはない病氣と云て斷て仕舞へ一人も還さない、ソレが罷り間違へば藩から放逐丈けの話だ長州征伐と云ふ事の理非曲直はどうでも宜しい兎に角に學者書生の關係すべき事でないから決して歸らせないと

頑張た所が藩の方でも因循であつたのか強ひて呼返すと云ふこともせず其罪は中津に居る父兄の身に降り來て其方共の子弟が命に背いて歸藩せぬのは平生の教訓宜しからざるに由る云々の文句で何でも五十日か六十日の閉門を申付けられたことがある凡そ私の心事はこんな風で藩に仕へて藩政を如何しやうとも思はず立身出世して威張らうとも思はず世間で云ふ功名心は腹の底から洗たやうに何にもなかつた

藩に對しての身の成行心の置どころは右の通りで扱江戸に來て居る中に幕府に雇はれて後にはいよゝゝ幕府の家來になつて仕舞へと云ふので高百五十俵正味百俵ばかりの米を貰て一寸と旗本のやうな者になつて居たことがあるけれども是れ亦藩に居るときと同様幕臣になつて功名手柄をしやうと云ふやうな野心はないから隨て自分の身

分が何であらうとも氣に留めたとがない一寸とした事だが可笑しい話がある其次第は江戸で御家人の事を旦那と云ひ旗本の事を殿様と云ふのが一般の慣例である所が私が旗本になつたけれども固より自分で殿様なんて馬鹿氣たとを考へる譯けもなければ家内の者も其通りで平生と少しも變た事はない爾うすると或日知己の幕人(地源一郎とあつた)が玄關に來て殿様はお内か「イーエそんな者は居ません」お内においでなさらぬか殿様は御不在か「そんな人は居ません」と取次の下女と頻に問答して居る様子狭い家だからスグ私が聞付けて玄關に出て其客を座敷に通したとがあるが成るほど殿様と云て下女に分る譯けはない私の家の中で云ふ者もなければ聞た者もない言葉だから夫れでも私に全く政治思想のないではない例へば文久二年歐行の船中で松木弘安と箕作秋坪と私と三人色々日本の時勢論を論じて其時

私が「ドウだ」逆も幕府の一手持は六かしい先づ諸大名を集めて獨逸聯邦のやうにしては如何と云ふに松木も箕作も「マアそんな事が穩かだらう」と云ふ夫れから段々身の上話に及んで「今日吾々共の思ふ通りを云へば正米を年に二百俵貰ふて親玉(將軍)の御師匠番になつて思ふ様に文明開國の説を吹込んで大變革をさして見たい」と云ふと松木が手を拍て「左様だ」是れは遣て見たいと云たのは松木の功名心も其時には二百俵の米を貰ふて將軍に文明説を吹込むぐらゐの事で當時の洋學者の考は大抵皆大同小異一身の爲めに大きな事は考へない後に其松木が寺島宗則となつて參議とか外務卿とか云ふ實際の國事に當たのは實は本人の柄に於て商賣違ひであつたと思ひます夫れは扱置き世の中の形勢を見れば天下の浮浪即ち有志者は京都に集て居る夫れから江戸の方では又幕府と云ふものが勿論時の政府で

リキンで居ると云ふ譯けて日本の政治が東西二派に相分れて勤王佐幕と云ふ二派の名が出来た出来た所で「サア其處に至て私が如何するかと云ふに

第一私は幕府の門閥壓制鎖國主義が極々嫌ひで之に力を盡す氣はない

第二左ればとて彼の勤王家と云ふ一類を見れば幕府より尙ほ一層甚だしい攘夷論でこんな亂暴者を助ける氣は固よりない

第三東西二派の理非曲直は姑く扱置き男子が所謂宿昔青雲の志を達するは亂世に在り勤王でも佐幕でも試みに當て碎けると云ふが書生の事であるが私には其性質習慣がない

今その次第を語りませう抑も私が始めて江戸に來た時からして幕府の人には感服しない一寸と旗本御家人に出遇ふ所が應接振りは上品

で田舎者と違ひ辯舌も好く行儀も立派であるが何分にも外邊ばかり
 で物事を緻密に考へる腦力もなければ又腕力も弱さうに見える。けれ
 ども先方は幕府の御直參此方は見る影もない陪臣だから手の着けや
 うもなく旗本などに對しては其人の居ない處でも何様々々と尊敬し
 て居る其鹽梅式は京都の御公卿様を取扱ふやうに唯見た所ばかりを
 丁寧にして心の中では見縊り抜て居た所が其無腦力無腕力と思ふ幕
 府人の劍幕は中々大造のものである些細な事のやうだが當時最も癩
 に障るのは旅行の道中で幕人の威張り方と云ふものは逆も今時の人
 に想像は出来ない私などは譜代大名の家來だから丸で人種違ひの蛆
 蟲同様幕府の役人は勿論凡そ葵の紋所の付て居る御三家と云ひ夫れ
 から徳川親藩の越前家と云ふやうな大名か又は其家來が道中をして
 居る處に打付からうものならソリヤ堪らない寒中朝寒い時に宿屋を

出て河を渡らうと思て寒風の吹く處に立て一時間も船の來るのを待
 て居るヤツと船が着てやれ嬉しや此船に乗らうと云ふ時に不意と後
 ろから葵の紋の侍が來ると其者が先きへ其船に乗て仕舞ふ又アト一
 時間も待たなければならぬ駕籠を昇ぐ人足でも無人のときには吾々
 は問屋場に行て頼んでヤツと出來た處にアトから例の葵の紋が來る
 と出來た其人足を横合から取られて仕舞ふ如何なお心善でも腹を立
 てずには居られない凡そ幕府の壓制売威張りは際限のない事ながら
 私共が若い時に直接に侮辱輕蔑を受けたのは道中の一事でも血氣の
 熱心は自から禁ずることが出來ず前後左右に深い考へもなく唯癩癩
 の餘りにこんな惡政府は世界中にあるまいと腹の底から觀念して居
 た
 幕政の売威張りが癩癩に障ると云ふのは是れは此方の血氣の熱心で

あるとして姑く差置き扱この日本を開いて外國交際をドウするかと云ふことになつては如何も見て居られないと云ふのは私は若い時から洋書を讀んで夫れから亞米利加に行き其次には歐羅巴に行き又亞米利加に行つて只學問ばかりでなく實地を見聞して見れば如何しても對外國是は斯う云ふやうに仕向けなければならぬとボンヤリした處でも外國交際法と云ふことに氣の付くは當然の話であらうソコで其私の考から割出して此徳川政府を見ると殆んど取所のない有様で當時日本國中の輿論は都て攘夷で諸藩残らず攘夷藩で徳川幕府ばかりが開國論のやうに見えもすれば聞えもするやうでありますけれども正味の精神を吟味すれば天下隨一の攘夷藩西洋嫌ひは徳川であると云て間違ひはあるまい或は後年に至て大老井伊掃部頭は開國論を唱へた人であるとか開國主義であつたとか云ふやうな事を世間で吹聴する

人もあれば書に著はした者もあるが開國主義なんて大嘘の皮何が開國論なものか存じ掛りもない話だ井伊掃部頭と云ふ人は純粹無雜申分のない參河武士だ江戸の大城炎上るとき幼君を守護して紅葉山に立退き周圍に枯草の繁りたるを見て非常の最中不用心なりとて親から腰の一刀を抜て其草を切拂ひ手に幼君を擁して終夜家外に立詰めなりしと云ふ話がある又この人が京都邊の攘夷論者を捕縛して刑に處したることはあれども是れは攘夷論を惡む爲めではない浮浪の處士が横議して徳川政府の政權を犯すが故に其罪人を殺したのである是等の事實を見ても井伊大老は眞實間違ひもない徳川家の譜代豪勇無二の忠臣ではあるが開鎖の議論に至ては眞闇な攘夷家と云ふより外に評論はない唯其徳川が開國であると云ふのは外國交際の衝に當て居るから餘儀なく澁々開國論に従て居た丈けの話で一幕捲て正味

の樂屋を見たらば大變な攘夷藩だ、こんな政府に私が同情を表すと
が出来ないと云ふのも無理はなからう先づ其時の徳川政府の頑固な
一例を申せば斯う云ふことがある私がチエーンバーの經濟論を一冊
持て居て何か話の序に御勘定方の有力な人即ち今で申せば大藏省中
の重要な職に居る人に其經濟書の事を語ると大造悦んでドウか目録
だけでも宜いから是非見たいと所望するから早速翻譯する中にコン
ベチションと云ふ原語に出遭ひ色々考へた末競争と云ふ譯字を造り
出して之に當筋め前後二十條ばかりの目録を翻譯して之を見せた所
が其人が之を見て頻りに感心して居たやうだが「イヤ茲に争と云ふ字
があるドウも是れが穩かでない、どんな事であるか」どんな事ツて是れ
は何も珍らしいことはない日本の商人のして居る通り隣で物を安く
賣ると云へば此方の店ではソレよりも安くしやう又甲の商人が品物

を安くすると云へば乙はソレよりも一層宜くして客を呼ばうと斯う
云ふので又或る金貸が利息を下ければ隣の金貸も割合を安くして店
の繁昌を謀ると云ふやうな事で互に競ひ争ふてソレで以てちやんと
物價も定まれば金利も極まる之を名けて競争と云ふので御座る「成程
爾うか西洋の流義はキツイものだね」何もキツイ事はないソレで都て
商賣世界の大本が定まるのである「成程爾う云へば分らないことはな
いが何分ドウも争と云ふ文字が穩かならぬ是れではドウも御老中方
へ御覽に入るとが出来ないと妙な事を云ふ其様子を見るに經濟書
中に人間互に相譲るとか云ふやうな文字が見たいのであらう例へば
商賣をしながらも忠君愛國國家の爲めには無代價でも賣るとか云ふ
やうな意味が記してあつたらば氣に入るであらうが夫れは出来ない
から「ドウも争と云ふ字が御差支ならば外に翻譯の致しやうもないか

ら丸で是れは削りませうと云て競争の文字を眞黒に消して目録書を渡したことがある此一事でも幕府全體の氣風は推察が出来ませう、夫れから又長州征伐のとき外國人は中々注意して居て或時英人であつたか米人であつたか幕府に書翰を出し長州の大名にドウ云ふ罪があつて征伐するのだらうかソレを承りたいと云て來た爾うすると其時の閣老役人達がいろく評議をしたと見え長々と返辭を遣た其返辭の中に開鎖論といふとを頼と云はない當りまへならば國を開いた今日長州の大名は政府の命令を奉ぜずに外國人を敵視するとか下ノ關で外國の船艦に發砲したからとか云ひさうなものであるにソんな事は一言半句も云はないでイヤどうも京都に暴れ込んだとか或は勅命に戻り臺命に背き其罪南山の竹を盡すも數へがたしと云ふやうな漢學者流の文句をゴテく書て遣た私は其返辭を見てコリヤどうも仕

様がない表面には開國を裝ふて居るも幕府は眞實自分も攘夷が爲たくて堪らないのだ逆もモウ手の着けやうのない政府だと實に愛想が盡きて同情する氣がない

然らば則ち之に取て代らうと云ふ上方の勤王家はドウだと云ふに彼等が代たら却てお釣の出るやうな攘夷家だコリヤ又幕府よりか一層悪い勤王攘夷と佐幕攘夷と名こそ變れ其實は双方共に純粹無雜な攘夷家で其攘夷に深淺厚薄の別はあるも詰る所は双方共に尊攘の仕振りが善いとか悪いとか云ふのが争論の點で其争論喧嘩が遂に上方の攘夷家と關東の攘夷家と鐵砲を打合ふやうな事になるであらうドチラも頼むに足らず其中にも上方の勤王家は事實に於て人殺しもすれば放火もして居る其目的を尋ねて見ると假令此國を焦土にしても飽くまで攘夷をしなければならぬと云ふ觸込みで一切萬事一舉一動

悉く攘夷ならざるはなし然るに日本國中の人がワツとソレに應じて騒ぎ立て居るのであるから何としても之に同情を表して仲間になるやうな事は出来られない是れこそ實に國を滅す奴等だこんな不文不明な分らぬ亂暴人に國を渡せば亡國は眼前に見える情けない事だと云ふ考が始終胸に染込んで居たから何としても上方の者に左袒する氣にならぬ其前後に緒方の隠居は江戸に居る是れは故緒方洪庵先生の夫人で私は阿母さんのやうにして居る恩人である或時に隠居が私と箕作を呼んでドウぢやいお前さん方は幕府に雇はれて勤めて居るけれども馬鹿々々しい止しなさいソレよりか上方に行て御覽ソリヤどうもいろ／＼な面白いことがあるぜと云ふ段々聞て見ると村田藏六即ち大村益次郎とか佐野榮壽(常民)とか云ふやうな有志者が皆緒方の家に入出入をして居るソレを隠居さんが知て居て私と箕作の事は自

分の子のやうにして居たものだから江戸に居るな上方に行けと勧めたのも無理はない其時に私は誠に難有うございませう大阪に行けば必ず面白い仕事がありませうけれども私はドウも首をもがれたツて攘夷のお供は出来ませぬ爾うぢやないか箕作と云て断わつたことがありましたが其位の譯けでドウしても其上方勢に與みすることは出来なかつた

夫からモウ一つ私の身に就て云へば少年の時から中津の藩を出て仕舞たので所謂藩の役人らしい公用を勤めたことがない夫れから前にも云ふ通り江戸に来て徳川の政府に雇はれたからと云た所が是れは云はゞ筆執る翻譯の職人で政治に與からう譯けもない只職人の積りで居るのだから政治の考と云ふものは少しもない自分でも仕やうとも思はなければ又私は出来やうとも思はない假令ひ又私が奮發して

幕府なり上方なり何でも都合の宜い方に飛出すとした處が人の下流に就て仕事をするとは固より出來ず中津藩の小士族で他人に侮辱輕蔑された其不平不愉快は骨に徹して忘れられないから今更ら他人に届してお辭儀をするのは禁物である左れば大に立身して所謂政治界の大人とならんか是れも甚だ面白くない前にも申した通り私は儀式の箱に入れられて小さくなるのを嫌ふ通りに其通りに儀式張て横風な顔をして人を目下に見下だすことも亦甚だ嫌ひである例へば私は少年の時から人を呼棄にしたことがない車夫馬丁人足小商人の如き下等社會の者は別にして苟も話の出來る人間らしい人に對して無禮な言葉を用ひたことはない青年書生は勿論家内の子供を取扱ふにも其名を呼棄にすることは出來ない左る代りに政治社會の歴々とか何とか云ふ人を見ても何ともない夫れも白髮の老人とでも云へば老

人相應に待遇はすれども其人の官爵が高いなんて高慢な風をすれば唯可笑しいばかりで話をするのも面白くない是れは私が持て生れた性質か又は書生流儀の習慣か老年の今日に至るまでも同じ事で之を要するに如何しても青雲の雲の上には向きの悪い男であるから維新前後にも獨り別物になつて居たことゝ自分で自分の事を推察して居ますソレはソレとして

扱慶喜さんが京都から江戸に歸て來たと云ふ其時にはサア大變朝野共に物論沸騰して武家は勿論長袖の學者も醫者も坊主も皆政治論に忙しく酔へるが如く狂するが如く人が人の顔を見れば唯その話ばかりで幕府の城内に規律もなければ禮儀もない平生なれば大廣間溜の間、雁の間、柳の間なんて大小名の居る處で中々喧ましいのが丸で無住のお寺を見たやうになつてゴロ／＼箕坐を搔て怒鳴る者もあればソ

ツト袂たもとから小さいピンを出だしてブランデーを飲のんでる者もあると云ふやうな亂脈らんまぐになり果はてたけれども私は時勢じせいを見る必要ひつたうがある城じやう中の外國ぐわいこく方に翻譯ほんやく杯はいの用ようはないけれども見物けんぶつ半分はんぶんに毎日まいにちの様に城じやう中ちゆうに出でて居ゐましたが其政論せいろん流行りやうの一例いちれいを云いつて見みると或日あるひ加藤かとう弘ひろ之の今いま一ひと人ひと誰だれであつたか名なを覺おぼえませぬが二人ふたりが社かみ杯しはいを着きて出でて來きて外國ぐわいこく方の役所やくしよに休息きゆうきして居ゐるから私わたしが其處そこへ行いつてイヤ加藤かとう君きみ今日けふは社かみ杯しはいで何事なにごとに出でて來きたのかと云いふと何事なにごとだつてお逢あひを願ねがふと云いふのは此この時に慶喜けいきさんが歸かへて來きて城じやう中ちゆうに居ゐるでせうソコで色々いろくな策士さくし論ろん客忠かくちゆう臣しん義士ぎしが躍氣やくきとなつて上方かみかたの賊軍さくぐんが出發しゅつぱつしたから何なんでも是これは富士川ふじがはで防まもがなければならぬとかイヤ爾なんうでない箱根はこねの嶮阻けんそに據よつて二子山ふたこやまの處ところで賊さくを壓殺おさころしにするが宜いい東照神君とうしやうしんきみ三百年さんひゃくねんの洪業こうげふは一朝いつてふにして捨すつ可からず吾々われわれ臣子しんしの分ぶんとして義ぎを知るの王臣わうしんとなつて生いけ

るは恩おんを知るの忠臣ちゆうしんとなつて死しするに若しかずなんて種々しゆくしゆく様々さまさまの奇策きさく妙案めうあんを献けんじ悲憤慷慨ひはんかうがいの氣焰きえんを吐はく者が多おほいから云いはずと知れた加藤等かとうらうも其連中そのれんちゆうで慶喜けいきさんにお逢あひを願ねがふ者に違ちがひないソコ私わたしが今度こんどの一件いっけんはドウなるだらういよ／＼戦争せんじゆうになるかならないか君達きみたちには大抵たいてい分わかるだらうからドウぞ夫れを僕わがに知しらして呉くれれ給たまへ是非ぜいひ聞ききたいものだソレを聞きて何なににするか何なんにするつて分わかてるではないか是れがいよ／＼戦争せんじゆうに極きよくまれば僕わがは荷物にもつを拵しらへて逃にげなくてはならぬ戦争せんじゆうにならぬと云いへば落付おちづて居ゐる其和戰そのわせん如何いかんはなか／＼容易よういならぬ大切たいせつな事ことであるからドウぞ知しらして貰もらひたいと云いふと加藤かとうは眼めを丸まるくしてソんな氣樂きらくな事ことを云いて居ゐる時勢じせいではないぞ馬鹿ばか々々しんしんイヤ／＼氣樂きらくな所ところではない僕わがは命掛いのちがけだ君達きみたちは戰たたかふとも和陸わかくしやうとも勝かつ手にしなさい僕わがは始はじまると即刻すくなく逃にげて行いくのだからと云いたら加藤かとうがブ

リ／＼怒て居たことがあります
 夫れから又或日に外國方の小役人が出て来て時に福澤さんは家來は
 何人も召連れになるかと問ふから家來とは何だと云ふとイヤ事急な
 れば皆此城中に詰める方々にお賄を下さるので人数を調べて居る處
 です爾うかソレは誠に難有い難有いが私は勿論家來もなければ主人
 もないドウぞ福澤のお賄だけは止めにしておさい彌々戦争が始ま
 ると云ふのに此城の中に来て悠悠と辨當など喰て居られるものか始
 まらうと云ふ氣振りが見えれば何處かへ直ぐに逃出して行きます先
 づ私のお賄は要らないものとして下さいと笑て茶を呑んで居た全體
 を云ふと眞實徳川の人に戦ふ氣があれば私がそんな放語漫言したの
 を許す譯けはない直ぐ一刀の下に首が失くなる筈だけれども是れが
 所謂幕末の形勢で逆も本式に戦争などの出来る人氣でなかつた

其前に慶喜さんが東歸して来たときに政治上の改革とでも云ふか種
 々様々な役人が出来た可笑しくて堪らない新潟奉行に誰が命ぜられ
 て何處の代官に誰がなる甚だしきに至ては逝去て来た後の兵庫奉行
 になつた人さへあつて名義上の奉行だけは此方に出て居る夫れか
 ら又御目附になるもあれば御使番になるものもある何でも加藤弘之
 津田眞一(眞道)なども御目附か御使番かになつて居たと思ふ私にも御
 使番になれと云ふ奉書到來と云ふ儀式で夜中差紙が来たが眞平御免
 だ私は病氣で御座ると云て取合はない夫れから段々切迫して官軍上
 方勢が這入り込んでソロ／＼鎮將府と云ふやうなものが江戸に出来
 て慶喜さんは水戸の方に行くとなつたので是れは慶應四年即ち
 明治元年春からの騒ぎで其時に私は芝の新錢座に屋敷が買つてあつ
 たから引越さなければならぬ其屋敷の地坪は四百坪長屋が一棟に土

藏が一つある切りだから生徒の爲めに塾舎も拵へなければならず又私の住居も拵へなければならぬ、扱其普請の一段になつた所で江戸市中大騒動の最中却て都合が宜い八百八町只の一軒でも普請をする家はないソレどころではない荷物を擲げて田舎に引越すと云ふやうな者ばかり手廻しの宜い家では竈の銅壺まで外して仕舞て自分は土竈を拵へて飯を焚て居る者もある此最中に私が普請を始めた處が大工や左官の悦びと云ふものは一方ならぬ安いにも／＼何でも飯が喰はれさへすれば宜い米の代さへあれば働くと云ふ譯けで安い手間料で人手は幾らでもあるから普請は颯々と出来る其建物も新たに拵へるのではない奥平屋敷の古長屋を貰て來て凡そ百五十坪も普請したが入費は僅か四百兩ばかりで一切仕上げました、いよ／＼普請の出來たのは其年(明治元年)四月頃と覺ゆ其時私の朋友などは態々止めに来て

「今頃普請をするものがあるか何處でも家を毀はして立退くと云ふ時節に君獨り普請をしてドウする積りだ」と云ふから私は答へて「ソリヤ爾うでない今僕が新たに普請するから可笑しいやうに見えるけれども去年普請をして置たらドウするいよ／＼戦争になつて逃げる時に其家を擔いで行かれるものでない、成程今戦争になれば焼けるかも知れない又焼けないかも知れない假令ひ焼けても去年の家が焼けたと思へば後悔も何もしない少しも惜しくない」と云て颯々と普請をして果して何の災もなかつたのは投機商賣の中たやうなものです、何でも私の處で普請をした爲めに新錢座邊は餘程立退きが寡かつた彼處の内と云て思止まつた者も大分あつたやうだけれども實は私も心の中では怖いさ、何處から焼け始まつてドンな事になるか知れぬと思ふから

三二〇
何處かに逃げる用意はして置かなければならぬ屋敷の中に穴を掘て
隠れて居やうかソレでは雨の降るときに困る土藏の縁の下に這入て
居やうか若し大砲で撃れると困る、ドウしやうかと思ふ中に近所に紀
州の屋敷(今の芝離宮)があつて其紀州藩から幾人も生徒が來て居るを
幸ひ其人達に頼んで屋敷を見に行た所が廣い庭で土手が二重に喰違
ひになつて居る處がある此處が宜からう罷り違ていよ／＼ドン／＼
遣るやうにならば此處へ逃げて來やうけれども表から行かれない、行
かれないから海岸から行くより外ないと云ふのでいよ／＼セツパ詰
た其時に私は傳馬船を五六日の間雇て新錢座の濱邊に繋いで置たこ
とがあるサアいよ／＼と云ふときに家内の者を其船に乗せて海の方
から其紀州の屋敷へ行て土手の間に隠れて居やうと云ふ覺悟、その時
に私の處の子供が二人(總領の一太郎氏なり)と捨次男の捨次郎氏な

り)家内と子供を連れて其處へ行かうと云ふ覺悟をして居た所がソレ
程心配にも及ばず追々官軍が入込んで來た所が存外優しい決して亂
暴な事をしない既に奥平の屋敷が汐留にあつて彼處に居る(別室に居
る年寄を指して)一太郎のお祖母さんが其屋敷に居るので五歳ばかり
の一太郎が前夜からお祖母さんの處に泊て居た所が奥平屋敷のツヒ
近所に増山と云ふ大名屋敷があつて其屋敷へ不逞の徒が何人とか籠
て居ると云ふので長州の兵が取圍んでサア戦争だドン／＼遣て居る
夫れから捕まへられたとか斬られたとか或は奥平屋敷の溝の中に人
が斬倒されてソレを又上から鎗で突たと云ふやうな大騒動所で私の
忤はお祖母さんの處に居る奥平の屋敷も焼かれて仕舞ふだらう、あの
子とお祖母さんはドウならうかと大變な心配で迎ひに遣らうと云て
も遣ることも出來ない、夫れ是れする中に夕方になつた所で事は鎮ま

つて仕舞たが其時でも大變に優しくてジツとして居ればドウもしない何も此内に居る者に怪我をさせやうともしなければ亂暴もしないチャンと軍令と云ふものがあつて緋りが付て居るから安心しなさいと頻りに和めて一寸とも手を觸れないと云ふ一例でも官軍の存外優しかつたことが分る前に思たとは大違ひ何ともない

扱四月になつた所で普請も出来上り塾生は丁度慶應三年と四年の境が一番諸方に散じて仕舞て残た者は僅に十八人夫れから四月になつた所が段々歸て來て追々塾の姿を成して次第に盛になる又盛になる譯けもあると云ふのは今度私が亞米利加に行つた時には其以前亞米利加に行つた時よりも多く金を貰ひました所で旅行中の費用は都て官費であるから政府から請取た金は皆手元に残る故其金を以て今度こそは有らん限りの原書を買つて來ました大中小の辭書地理書歴史等は勿

論其外法律書經濟書數學書なども其時始めて日本に輸入して塾の何十人と云ふ生徒に銘々其版本を持たして立派に修業の出來るやうにしたのは實に無上の便利でしたソコ其當分十年餘も亞米利加出版の學校讀本が日本國中に行はれて居たのも畢竟私が始めて持て歸たのが因縁になつたことです其次第は生徒が始めて塾で學ぶ其學んで卒業した者が方々に出て教師になる教師になれば自分が今まで學んだものを其學校に用ゐるのも自然の順序であるから日本國中に慶應義塾に用ひた原書が流布して廣く行はれたと云ふのも事の順序はよく分て居ます

それで先づ官軍は存外柔かなものであつて何も心配はない併し政治上の事は極めて鋭敏なもので嫌疑と云ふことがあつては是れは容易ならぬ譯けであるからソレを明にする爲めに私は一切萬事何も斯も

打明けて一口に云へば塾も住居も殻明きにして仕舞ひ何處を捜した所で鐵砲は勿論一挺もなし刃物もなければ飛道具もない一目明白直に分るやうにしました始終爾う云ふ身構へにして居るから私の處には官軍方の人も颯々と來れば賊軍の人も颯々と出入りして居て私は官でも賊でも一切構はぬ何方に向ても依怙最負なしに扱て居るから双方共に朋友でした其時に斯う云ふ面白い事がありました官軍が江戸に乗込んでマダ賊軍が上野に籠らぬ前に市川邊に小競合がありました爾うすると賊軍方の者が夜は其處に行て戰て晝は睡いからと云て塾に來て寢て居た者があつたが根から構はない私は其人の話を聞て君はソナ事をして居るのか危ない事だマア止にした方が宜からうと云たくらゐることである

夫れから古川節藏は長崎丸と云ふ船の艦長であつたが榎本釜次郎よ

りも先驅けして脱走すると云ふので私に其事を話した所が節藏は先年私が大坂から連れて來た男で弟のやうにして居たから私は其話を聞て深切に止めましたソリヤ止すが宜い逆も叶はない戰爭すれば必ず負けるに違ひない東西ドチラが正しいとか正しくないとか云ふやうな理非曲直は云はないが何しろ斯う云ふ勢になつたからはモウ船に乗て脱走したからとて勝てさうにもしないからソレは思ひ止まるが宜いと云た所が節藏はマダなか／＼強氣で「ナアに屹度勝つ是れから出掛けて行て諸方に出沒して居る同志者を此船に乗せて便利の地に擧げて官軍が江戸の方に遣て來る其裏を衝て夫れから大阪灣に行て搔廻せば官軍が狼狽すると云ふやうな事になつて屹度勝算はありますと云て中々私の云ふことを聞かないから爾うかソレならば勝手にするが宜い乃公はモウ負けても勝ても知らないぞだが乃公は足下

を助けやうとは思はぬ唯可哀さうなのはお政さんだ(節藏氏の内君)ソレ丈けは生きて居られるやうに世話をして遣る足下は何としても云ふ事を聞かないから仕方がないドウでもしなさいと云て別れたことがあります

もう一ヶ條此時に仙臺の書生で以前此塾に居て夫れから亞米利加に留學して居た一條某と云ふものがあつてソレが亞米利加から歸て來た所が此男が發狂して居ると云ふソレを船中で深切に看病して呉れたと云ふのは矢張り一條と同時に塾に居た柳本直太郎是れは此間まで愛知縣の書記官をして居たが今では市長か何かになつて居るさうだ此柳本直太郎が深切に看病して横濱に着船した其時は丁度仙臺藩がいよいよ朝敵になつたときで江戸中で仙臺人と見れば見付次第捕縛と云ふことになつて居るソコで横濱に來た所が正しく仙臺人だ捕

縛しやうかと云ふに紛ふ方なき發狂人だドウにも手の着けやうがない其時に寺島(宗則)が横濱の奉行をして居て發狂人は仕方がないから打遣て置けと云ふやうな事で其儘にしてある其中に病人は人を疑ふ病症を發して飲食物に毒があると云て一切受け付けず凡そ一週間餘り何も飲食しない、飲食しないから其儘棄て、置けば餓死するソコでいろくゝと和めて勧めたけれども何としても喰はない爾うすると不意としたことで其病人が福澤先生に遇ひたいと云ふことを云出した福澤は江戸に居ませうソコで横濱に置くなら宜いが江戸に連れて行くのはドウかと思つて御奉行(寺島)に伺つた所が御奉行様も福澤に行くこと云ふなら颯々と連れて行けと云ふのでソレから新錢座に連れて來たソレが面白い、來た所で先づ取敢へず久振りと云て茶を出して茶も飲め序に飯も喰へと勧めて夫れから握飯を出して私も喫べるから君も一

つ喫べなさいソレが喫べられなければ私の喫べ掛けを半分喫べなさい毒はないぢやないかと云ふやうなことで試みた所がソコで喰出した喰て見れば氣狂ひの事だから今まで思て居たことは忘れて仕舞ひ新錢座に来て安心したと見え食氣は回復してソレは宜いがマダ病人が何を遣り出すか知れない晝夜番が要る所が可笑しい其時に薩州の者も居れば土州の者も居る其官軍一味の者が居て朝敵だから捕縛しやうと云ふ位な病人を扶けて看病して居る爾うすると仙臺の者が忍んで来る大槻の忤なども内々見舞に来て官軍と賊軍と塾の中で混り合て朝敵藩の病人を看病して居ながら何も風波もなければ苦味もないソナ事が塾の安全であつた譯けでせう眞實平等區別なし疑はんとするも疑ふ可き種がない一方には脱走して賊軍に投ずるがあるかと思へば一方にはチャンと塾に這入て居る官軍もあると云ふや

うな不思議な次第柄で斯う云ふ事は造たのぢや出来ぬ装ふても出来ぬ私は腹の底から偏頗な考がない少しも幕府の事を感服しなければ官軍の事をも感服しない戦争するなら銘々勝手にしろと裏も表もなく其趣意で貫いて居たから私の身も塾も危い所を無難に過したことと思ふ

夫れからいよ／＼王政維新と定まつて大阪に明治政府の假政府が出来て其假政府から命令が下た御用があるから出て来いと一番始めに沙汰のあつたのが神田孝平と柳川春三と私と三人所が柳川春三はドウも大阪に行くのは嫌だから命は奉ずるけれども御用があればドウゾ江戸に居て勤めたいと云ふ注文神田孝平は命に應じて行くと云ふ私は一も二もなく病氣で出られませぬと斷り其後大阪の假政府は江戸に遷て来て江戸の新政府から又御用召で度々呼びに来ましたけ

れども始終斷る計り或時神田孝平が私の處へ是非出ると云て勸めに來たから私は之に答へて一體君は何う思ふか男子の出處進退は銘々の好む通りにするが宜いではないか世間一般さうありたいものではないか之に異論はなからうソコデ僕の目から見ると君が新政府に出たのは君の平生好む所を實行して居るのだから僕は甚だ賛成するけれども僕自身には夫れが嫌ひだ嫌ひであるから出ないと云ふものは亦自分の好む所を實行するのだから君の出で居ると同じ趣意ではないか左れば今僕は君の進退を賛成して居るから君も亦僕の進退を賛成して福澤は能く引込んで居る旨いと云て譽めてこそ呉れさうなものだ夫れを譽めもせずに呼出しに来るとは友達甲斐がないぢやないかと大に論じて親友の間であるから遠慮會釋もなく勿付けたことがあつた夫れから幾ら呼びに來ても政府へはモウ一切出ないと説を

極めて居た所が或日細川潤次郎が私の處へ來たことがある其時はマダ文部省と云ふものゝない時で何でも此政府の學校の世話をしると云ふイヤそれは往けない自分は何もそんな事はしないと答へ夫れからいろ／＼の話もあつたが細川の云ふにドウしても政府に於て只棄て置くと云ふ理屈はないのだから政府から君が國家に盡した功勞を譽めるやうにしなければならぬと云ふから私は自分の説を主張して譽めるの譽められぬのと全體ソリヤ何の事だ人間が人間當前の仕事をして居るに何も不思議はない車屋は車を挽き豆腐屋は豆腐を拵へて書生は書を読むと云ふのは人間當前の仕事として居るのだ其仕事をして居るのを政府が譽めると云ふなら先づ隣の豆腐屋から譽めて貰はなければならぬソんな事は一切止しなさいと云て斷たことがある是れも随分暴論である

マア斯う云ふやうな調子で私は酷く政府を嫌ふやうにあるけれども其眞實の大本を云へば前に申した通りドウしても今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである攘夷は私の何より嫌ひな事でコンな始末では假令ひ政府は替ても逆も國は持てない、大切な日本國を滅茶苦茶にして仕舞ふだらう本當に爾う思た所が後に至て其政府が段々文明開化の道に進んで今日に及んだと云ふのは實に有難い目出たい次第であるが其目出たからうと云ふことが私には始めから測量が出来ずに唯其時に現れた實の有様に値を付けてコンな古臭い攘夷政府を造て馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は國を亡ぼし兼ねぬ奴等ぢやと思て身は政府に近づかず唯日本に居て何か勉めて見やうと安心決定したことである

私が明治政府を攘夷政府と思たのは決して空に信じたのではない自

から憂ふ可き證據がある先づ爰に一奇談を申せば王政維新となつて明治元年であつたが二年であつたか歳は覺えませぬが英吉利の王子が日本に來遊東京城に參内することになり表面は外國の貴賓を接待することであるから固より故障はなけれども何分にも穢れた外國人を皇城に入れると云ふのはドウも不本意だと云ふやうな説が政府部内に行はれたものと見えて王子入城の時に二重橋の上で潔身の祓をして内に入れたことがある、と云ふのは夷狄の奴は不淨の者であるから祓をして體を清めて入れると云ふ意味でせう所がソレが宜い物笑ひの種サ其時に亞米利加の代理公使にポルトメンと云ふ人が居まして毎度ワシントン政府に自分の任所の模様を報知して遣るけれども餘り必要でない事は大統領が其報告書を見ない此方では又ソレを見て貰ふのが公使の名譽としてある、ソコで公使が今度英の王子入城

に付き潔身の祓云々の事を探り出して大に悦び是れは締めた此大奇談を報告すれば大統領が見て呉れるに違ひないと云ふので其表書に即ちエツデンボルフ王子の清めと云ふ可笑しな不思議な文字を書て中の文句はドウかと云ふに此日本は眞實自尊自大の一小鎖國にして外國人をば畜生同様に取扱ふの常なり既に此程英吉利の王子入城謁見のとき城門外に於て潔身の祓を王子の身邊に施したり抑も潔身の祓とは上古穢れたる者を清めるに灌水法を行ひしが中世紙の發明以來紙を以て御幣なるものを作り其御幣を以て人の身體を撫で水の代用として一切の不淨不潔を拂ふの故實あり故に今度英の王子に施したるは其例に由ることにして日本人の眼を以て見れば王子も亦唯不淨の畜生たるに過ぎず云々とて筆を巧に事細かに書て遣つたことがあるソレは私が尺振八から詳に聞きました此尺振八と云ふ人は其時亞

米利加公使館の通辯をして居たので尺が私の處に来て此間是れく話大笑ひではないかと云て其事實も其書面の文句も私に親しく話して聞かせましたが實に苦々しい事で私は之を聞て笑ひ所ではない泣きたく思ひました

又その頃亞米利加の前國務卿シーワルトと云ふ人が令嬢と同伴して日本に來遊したことがある此人は米國有名の政治家で彼の南北戦争のとき専ら事に當てリンコルンの遭難と同時に兇徒に傷けられたこともある元來英國人とは反りが合はずに云はゞ日本最良の人でありながら今度來遊その日本の實際を見て何分にも最良が出来ぬこんな根性の人民では氣の毒ながら自立は六かしいと斷言したこともあるソコデ私が見る所で新政府人の舉動は都て儒教の糟粕を嘗め古學の固陋主義より割出して空威張りするのみ顧みて外國人の評論を聞け

ば右の通り、迎も是れは仕方がないと眞實落膽したれども左りとて自分は日本人なり無爲にしては居られず政治は兎も角も之を成行に任せて自分は自分にて聊か身に覺えたる洋學を後進生に教へ又根氣のあらん限り著書翻譯の事を勉めて萬が一にも斯民を文明に導くの儔伴もあらんかと便り少くも獨り身構へした事である

其時の私の心事は實に淋しい有様で人に話したことはないが今打明けて懺悔しませう維新前後無茶苦茶の形勢を見て迎も此有様では國の獨立は六かしい他年一日外國人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日全國中の東西南北何れを見ても共に語る可き人はない、自分一人では勿論何事も出來ず亦その勇氣もない實に情ない事であるがいよく、外人が手を出して跋扈亂暴と云ふときには自分は何とかして其禍を避けるとするも行先きの永い子供は可愛さうだ

一命に掛けても外國人の奴隸にはしたくない或は耶蘇宗の坊主にし
て政事人事の外に獨立させては如何自力自食して他人の厄介になら
ず其身は宗教の坊主と云へば自から辱しめを免かるゝこともあらん
かと自分に宗教の信心はなくして子を思ふの心より坊主にしやうな
ど、種々無量に考へたところがあるが三十年の今日より回想すれば恍と
して夢の如し唯今日は世運の文明開化を有難く拜するばかりです

扱鐵砲洲の塾を芝の新錢座に移したのは明治元年即ち慶應四年、明治
改元の前でありしゆゑ塾の名を時の年號に取て慶應義塾と名づけ一
時散じた生徒も次第に歸來して塾は次第に盛になる、塾が盛になつて
生徒が多くなれば塾舎の取締も必要になるからして塾則のやうなも
のを書いて是れも寫本は手間が取れると云ふので版本にして一冊づゝ
生徒に渡しソレには色々箇條のある中に生徒から毎月金を取ると云

ふことも慶應義塾が創めた新案である従前日本の私塾では支那風を眞似たのか生徒入學の時には束脩を納めて教授する人を先生と仰ぎ奉り入學の後も益暮兩度ぐらゐに生徒銘々の分に應じて金子なり品物なり熨斗を附けて先生家に進上する習はしでありしが私共の考へに迎もこんな事では活潑に働く者はない教授も矢張り人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある構ふことはないから公然價を極めて取るが宜いと云ふので授業料と云ふ名を作て生徒一人から毎月金二分づゝ取立て其生徒には塾中の先進生が教へることにしました其時塾に眠食する先進者は月に金四兩あれば喰ふことが出来たのでソコで毎月生徒の持て来た授業料を掻き集めて教師の頭に四兩づゝ行渡れば死はせぬと大本を定めて其上に尙ほ餘りがあれば塾舎の入用にすることにして居ました今では授業料なん

ぞは普通當然のやうにあるがソレを始めて行ふた時は實に天下の耳目を驚かしました生徒に向て金二分持て来い水引も要らなければ熨斗も要らない一兩持て来れば釣を遣るぞと云ふやうに觸込んでもソレでもちやんと水引を掛て持て来るものもあるヌルとこんな物があると札を檢める邪魔になると云て態と上包を還して遣るなどは随分殺風景なこと世間の人の驚いたのも無理はないが今日それが日本國中の風俗習慣になつて何ともなくなつたのは面白い何事に由らず新工風を運らして之を實地に行ふと云ふのは其事の大小を問はず餘程の無鐵砲でなければ出来たことではない左る代りに夫れが首尾能く參て何時の間にか世間一般の風になれば私の爲めには恰も心願成就でこんな愉快なことはありません

新錢座の塾は幸に兵火の爲めに焼けもせず教場もどうやらからやら

整理したが世間は中々喧しい明治元年の五月上野に大戦争が始まつて其前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て八百八町は眞の闇何が何やら分らない程の混乱なれども私は其戦争の日も塾の課業を罷めない上野ではどん／＼鐵砲を打て居るけれども上野と新錢座とは二里も離れて居て鐵砲玉の飛で來る氣遣はないと云ふので丁度あの時私は英書で經濟の講釋をして居ました大分騒々敷い容子だが畑でも見えるかと云ふので生徒等は面白がつて梯子に登て屋根の上から見物する何でも晝から暮過ぎまでの戦争でしたが此方に關係がなければ怖い事もない

此方が此通りに落付拂て居れば世の中は廣いもので又妙なもので兵馬騷亂の中にも西洋の事を知りたいと云ふ氣風は何處かに流行して上野の騷動が濟むと奥州の戦争と爲り其最中にも生徒は續々入學し

て來て塾はますます盛になりました願みて世間を見れば徳川の學校は勿論潰れて仕舞ひ其教師さへも行衛が分らぬ位況して維新政府は學校どころの場合でない日本國中苟も書を讀で居る處は唯慶應義塾ばかりと云ふ有様で其時に私が塾の者に語たとがある昔し／＼拿破翁の亂に和蘭國の運命は斷絶して本國は申すに及ばず印度地方まで悉く取られて仕舞て國旗を擧げる場所がなくなつた所が世界中織に一箇處を遺したソレは即ち日本長崎の出島である出島は年來和蘭人の居留地で歐洲兵亂の影響も日本には及ばずして出島の國旗は常に百尺竿頭に翻々して和蘭王國は曾て滅亡したることなしと今でも和蘭人が誇て居るシテ見ると此慶應義塾は日本の洋學の爲めには和蘭の出島と同様世の中に如何なる騷動があつても變亂があつても未だ曾て洋學の命脈を斷やしたことはないぞよ慶應義塾は一日も休業し

たことはない此塾のあらん限り大日本は世界の文明國である世間に
 頓着するなと申して大勢の少年を勵ましたことがあります
 夫れはそれとして又一方から見れば塾生の始末には誠に骨が折れま
 した戦争後意外に人の數は増したが其人はどんな種類の者かと云ふ
 に去年から出陣してさんく奥州地方で戦て漸く除隊になつて國に
 は歸らずに鐵砲を棄て、其儘塾に來たと云ふやうな少年生が中々多
 い中にも土佐の若武者などは長い朱鞘の大小を挾して鐵砲こそ持た
 ないが今にも斬て掛らうと云ふやうな恐ろしい顔色をして居る爾う
 かと思ふと其若武者が紅い女の着物を着て居る是れはドウしたのか
 と云ふと會津で分捕りした着物だと云て威張て居る實に血腥い怖い
 人物で一見先づ手の着けやうがないソコデ私は前申す通り新錢座の
 塾を立てると同時に極めて簡単な塾則を拵へて塾中金の貸借は一切

相成らぬ寝るときは寝て、起るときは起き、喰ふときには定め時間に
 食堂に出る、夫れから樂書一切相成らぬ壁や障子に樂書を禁ずるは勿
 論自分所有の行燈にも机にも一切の品物に樂書は相成らぬと云ふく
 らゐの箇條で既に規則を極めた以上はソレを實行しなくてはならぬ
 ソコで障子に樂書してあれば私は小刀を以て其處だけ切破て此部屋
 に居る者が元の通りに張れと申付ける夫れから行燈に書てあれば誰
 の行燈でも構はぬ其持主を咎めると時としては其者が是れは自分で
 ない人の書たのですと云ても私は許さぬ人が書たと云ふのは云譯け
 にならぬ自分の行燈に樂書されてソレを見て居ると云ふのは馬鹿だ
 馬鹿の罰に早々張替へるが宜しい樂書した行燈は塾に置かぬ破るか
 らアトを張て置きなさいと云ふやうにして寸毫も假さない如何に血
 醒い若武者が何と云はうともそんな事を恐れて居られないミシく

遣付けて遣る名は忘れたが不圖見た所が桐の枕に如何な樂書がしてある「コリヤ何だ銘々の私有品でも樂書は一切相成らぬと云たではないかドウ云ふ譯けだ一句の返答も出來なからう此枕は私は削りたいけれども削ることが出來ない打毀はすから代りを取て來なさいと云て其枕を取上げて足で踏潰してサアどうでもしろ摺み掛けて來るなら相手にならうと云はぬばかりの思惑を示した所で決して掛らぬ全體私は骨格は少し大きいが本當は柔術も何も知らない生れてから人を打たこともない男だけれども其權幕はドウも撃ちさうな摺み掛りさうな氣色で、口の法螺でなくして身體の法螺で吹倒した所が皆小さくなつて言ふことを聞くやうになつて來てソレでマア戰爭歸りの血腥い奴も自から静になつて塾の治まりが付き其中には眞成な大人しい學者風の少年も多く至極勉強してますく塾風を高尙にして明治四

年まで新錢座に居ました

維新の騷亂も程なく治まつて天下太平に向て來たが新政府はマダマダ跡の片付が容易な事ではなくして明治五六年までは教育に手を着けることが出來ないで専ら洋學を教へるは矢張り慶應義塾ばかりであつた何でも廢藩置縣の後に至るまでは慶應義塾ばかりが洋學を専らにしてソレから文部省と云ふものが出來て政府も大層教育に力を用ふることになつて來た義塾は相變らず元の通りに生徒を教へて居て生徒の數も段々殖えて塾生の數は常に二百から三百ばかり教ふる所の事は一切英學と定め英書を讀み英語を解するやうにとばかり教導して古來日本に行はれる漢學には重きを置かぬと云ふ風にしたから其時の生徒の中には漢書を讀むとの出來ぬ者が随分あります漢書を讀まずに英語ばかりを勉強するから英書は何でも讀めるが日本の手

紙が讀めないといふやうな少年が出来て来た、物事がアベコベになつて世間では漢書を讀でから英書を學ぶと云ふのを此方には英書を學んでから漢書を學ぶと云ふ者もあつた、波多野承五郎などは小供の時から英書ばかり勉強して居たので日本の手紙が讀めなかつたが生れ付き文才があり氣力のある少年だから英學の跡で漢書を學べば造作もなく漢學が出来て今では彼の通り何でも不自由なく立派な學者に成て居ます畢竟私が此日本に洋學を盛にして如何でもして西洋流の文明富強國にしたいと云ふ熱心で其趣は慶應義塾を西洋文明の案内者にして恰も東道の主人と爲り西洋流の一手販賣特別エゼントとでも云ふやうな役を勤めて外國人に頼まれもせぬ事を遣て居たから古風な頑固な日本人に嫌はれたのも無理はない元來私の教育主義は自然の原則に重きを置いて數と理と此二つのものを本にして人間萬事有

形の經營は都てソレから割出して行きたい、又一方の道德論に於ては人生を萬物中の至尊至靈のものなりと認め自尊自重苟も卑劣な事は出来ない不品行な事は出来ない、不仁不義不忠不孝ソんな淺ましい事は誰に頼まれても何事に切迫しても出来ないと一身を高尙至極にし所謂獨立の點に安心するやうにしたいものだ、と先づ土臺を定めて一心不亂に唯この主義にのみ心を用ひたと云ふ其譯けは古來東洋西洋相對して其進歩の前後遅速を見れば實に大造な相違である、双方共々に道德の教もあり經濟の議論もあり文に武にものゝ長所短所ありながら扱國勢の大體より見れば富國強兵最大多數最大幸福の一段に至れば東洋國は西洋國の下に居らねばならぬ國勢の如何は果して國民の教育より來るものとすれば双方の教育法に相違がなくてはならぬ、ソコで東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに東洋に

なきものは有形に於て數理學と無形に於て獨立心と此二點である彼の政治家が國事を料理するも實業家が商賣工業を働くも國民が報國の念に富み家族が團樂の情に濃なるも其大本を尋れば自から由來する所が分る近く論ずれば今の所謂立國の有らん限り遠く思へば人類のあらん限り人間萬事數理の外に逸することは叶はず獨立の外に依る所なしと云ふ可き此大切なる一義を我日本國に於ては軽く視て居る是れでは差向き國を開て西洋諸強國と肩を並べることには出來さうにもしない全く漢學教育の罪であると深く自から信じて資本もない不完全な私塾に専門科を設けるなどは逆も及ばぬ事ながら出來る限りは數理を本にして教育の方針を定め一方には獨立論の主義を唱へて朝夕一寸した話の端にも其必要を語り或は演説に説き或は筆記に記しなどして其方針に導き又自分にも様々工風して躬行實踐を勉め

ますく漢學が不信仰になりました今日にても本塾の舊生徒が社會の實地に乘出して其身分職業の如何に拘らず物の數理に迂濶ならず氣品高尚にして能く獨立の趣意を全うする者ありと聞けば是れが老餘の一大樂事です

右の通り私は唯漢學が不信仰で漢學に重きを置かぬ計りでない一歩を進めて所謂腐儒の腐説を一掃して遣らうと若い時から心掛けましたソコで尋常一様の洋學者や通詞など云ふやうな者が漢學者の事を悪く云ふのは普通の話で餘り毒にもならぬ所が私は随分漢書を讀で居る讀で居ながら知らない風をして毒々敷い事を言ふから憎まれずには居られない他人に對しては眞實素人のやうな風をして居るけれども漢學者の使ふ故事などは大抵知て居ると云ふのは前にも申した通り少年の時から六かしい經史をやかましい先生に授けられて本當

に勉強しました左國史漢は勿論詩經書經のやうな經義でも又は老子莊子のやうな妙な面白いものでも先生の講義を聞き又自分に研究しました是れは豊前中津の大儒白石先生の賜である其經史の義を知て知らぬ風をして折々漢學の急處のやうな所を押へて話にも書たものにも無遠慮に攻撃するから是れぞ所謂獅子身中の蟲で漢學の爲めには私は實に悪い外道である斯くまでに私が漢學を敵にしたのは今の開國の時節に陳く腐れた漢説が後進少年生の腦中に蟠まつては逆も西洋の文明は國に入ることが出來ないと飽くまでも信じて疑はず如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと有らん限りの力を盡し私の眞面目を申せば日本國中の漢學者は皆來い乃公が一人で相手にならうと云ふやうな決心であつたソコで政府を始め世間一般の有様を見れば文明の教育稍々普ねしと雖も中年以上の重なる人は

逆も洋學の佳境に這入ることは出來ず何か事を謀り事を斷ずる時には餘儀なく漢書を便にして萬事ソレから割出すと云ふ風潮の中に居て其大切な靈妙不思議な漢學の大主義を頭から見下して敵にして居るから私の身の爲めには随分危ない事である又維新前後は私が著書翻譯を勉めた時代で其著譯書の由來は福澤全集の緒言に記してあるから之を略しますが元來私の著譯は眞實私人の發意で他人の差圖も受けねば他人に相談もせず自分の思ふ通りに執筆して時の漢學者は無論朋友たる洋學者へ草稿を見せたこともなければ況して序文題字など頼んだこともない是れも餘り殺風景で實は當時の故老先生とか云ふ人に序文でも書かせた方が宜かつたか知れないが私は夫れが嫌ひだソんな事かた／＼で私の著譯書は事實の如何に拘はらず古風な人の氣に入る筈はないソレでも其書が殊更らに大に流行したのは

文明開國の勢に乗じたことでありませう

慶應義塾が芝の新錢座を去て三田の只今の處に移たのは明治四年、是れも塾の一大改革です。一通り語りませう。其前年五月、私が酷い熱病に罹り、病後神経が過敏になつた所爲か、新錢座の地所が何か臭いやうに鼻に感じる。又事實、濕地でもあるから、何處かに引移りたいと思ひ、飯倉の方に相當の賣家を捜出して、略相談を極めやうとするときに、塾の人の申すに、福澤が塾を棄て、他に移るなら、塾も一緒に移らうと云ふ説が起つて、其時には東京中に大名屋敷が幾らもあるので、塾の人は毎日のやうに方々の明屋敷を捜して廻はり、彼處でもない、此處でもない、と勝手次第に宜さうな地所を見立て、いよいよ芝の三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で、海濱の眺望も、良し、塾には適當だと衆論一決はしたれども、此方の説が決した計りで、其屋敷は他人の屋敷である

から之を手に入れるには、東京府に頼み、政府から島原藩に上地を命じて改めて福澤に貸渡すと云ふ趣向にしなければならぬ。ソレには政府の筋に内談して出来るやうに拵へねばならぬと云ふので、時の東京府知事に頼込むは、勿論私の平生知て居る佐野常民、その他の人にも、事の次第を語りて助力を求め、塾の先進生惣掛りにて運動する中に、或日は岩倉公の家に参り、初めて推參なれども、御目に掛りたいと申込んで、公に面會色々塾の事情を話して、詰り島原藩の屋敷を拜借したいと云ふ事を内願して、是れも快く引受けて呉れる何處も、此處も至極都合の好い折柄、幸ひにも東京府から私に頼む事が出来て、來たと云ふは當時東京の取締には、遷卒とか何とか云ふ名を付けて、諸藩の兵士が鐵砲を擔いで市中を巡廻して居る其有様の殺風景とも、何とも丸で戦地のやうに見える政府も、之を宜くないことと思ひ、西洋風にボリスの仕組に

改革しやうと心付きはしたが扱そのポリスとは全體ドンなものであるか概略でも宜しい取調べて呉れぬかと役人が私方に來て懇々内談する其様子は此取調さへ出來れば何か禮をすると云ふやうに見えるから此方は得たり賢しお易い御用で御座る早速取調べて上げませうが私の方からも願の筋がある兼て長官へ内々御話いたしたこともある通り三田の島原の屋敷地を拜借いたしたい是れ丈けは厚く御舍を願ふと云ふは巡查法の取調と屋敷地の拜借と交易にしよう云ふやうな鹽梅に持掛けて役人も否と云はずに黙諾して歸るソレから私は色々な原書を集めて警察法に關する部分を翻譯し綴り合せて一冊に認め早々清書して差出した所が東京府では此翻譯を種にして尙ほ市中の實際を斟酌し様々に工風して斷然彼の兵士の巡廻を廢し改めて巡邏と云ふものを組織し後に之を巡查と改名して東京市中に平和穩當の

取締法が出来ましたソコで東京府も私に對して自から義理が出来たやうな譯けで屋敷地の一條もスラ／＼行はれて島原の屋敷を土地させて福澤に拜借と公然命令書が下り地所一萬何千坪は拜借建物六百何十坪は一坪一圓の割合にて所謂大名の御殿二棟長屋幾棟の代價六百何十圓を納めていよ／＼塾を移したのが明治四年の春でした引越して見れば誠に廣々とした屋敷で申分なし御殿を教場にし長局を書生部屋にして尙ほ足らぬ處は諸方諸屋敷の古長屋を安く買取寄宿舍を作りなどして俄に大きな學塾に爲ると同時に入學生の數も次第に多く此移轉の一舉を以て應慶義塾の面目を新にしました序ながら一奇談を語りませう新錢座の塾から三田に引越し屋敷地の廣さは三十倍にもなり建物の廣大な事も新舊較べものにならぬ新塾の教場即ち御殿の廊下などは九尺巾もある私は毎日塾中を見廻り日曜は

殊に掃除日と定めて書生部屋の隅まで一々検め大小便所の内まで私
 が自分で戸を明けて細に見ると云ふやうにして居たから一日に幾度
 び廊下を通して幾人の書生に逢ふか知れない所が其行逢ふ毎に新入生
 などは勝手を知らずに私の顔を見ると丁寧な辭儀をする先方から丁
 寧に遣れば此方も之に應じて辭儀をしなければならぬ忙しい中にウ
 ルサクで堪まらぬソレから先進の教師連に尋ねて廊下で書生のお辭
 儀に困りはせぬか双方の手間潰だがと云ふと何れも同様塾が廣くな
 つて家の内の御辭儀には閉口と云ふからよし來た乃公が廣告を掲示
 して遣ると云て

塾中の生徒は長者に對するのみならず相互の間にも粗暴無禮は固
 より禁ずる所なれども講堂の廊下その他塾舎の内外往來頻繁の場
 所にては假令ひ教師先進者に行逢ふとも丁寧に辭儀するは無用の

沙汰なり互に相見て互に目禮を以て足るべし益もなき虚飾に時を
 費すは學生の本色に非ず此段心得の爲めに掲示す

と張紙して生徒のお辭儀を止めた事がある長者に對して辭儀をする
 など云へば横風になれ禮儀を忘れよと云ふやうに聞えて奇なやうに
 思はれるが其時の事情は決して爾うでない百千年來壓制の下に養は
 れて官民共に一般の習慣を成したる此國民の氣風を活潑に導かんと
 するにはお辭儀の廢止も自から一時の方便で其功能は慥に見えまし
 た今でも塾にはコンな風が遺て生徒取扱ひの法は塾の規則に従ひ不
 法の者があれば會釋なくミシク遣付けて寸毫も假さず生徒に不平
 があらば皆出て行け此方は何ともないとチャンと説を極めて思ふ様
 に制御して居れども教師其他に對して入らざる事に敬禮なんかんと
 云ふやうな田舎らしい事は塾の習慣に於て許さない左ればとて本塾

の生徒に限て粗暴な者が多いでもなし一方から見ても幾分か其氣品の高尙にして男らしいのは虚禮虚飾を脱した其功德であらうと思はれる

三田の屋敷は福澤諭吉の拜借地になつて地租もなければ借地料もなし恰も私有地のやうではあるが何分にも拜借と云へば何時立退を命じられるかも知れず東京市中を見れば私同様官地を拜借して居る者は甚だ多い孰れも不安心に違ひないと推察が出来る如何かして之を御拂下にして貰ひたいと様々思案の折柄當時政府に左院と稱して議政局のやうなものが立て居て其左院の議員中に懇意の人があるから其人に面會何か話の序には拜借地の有名無實なるを説き等しく官地を使用せしむるならば之を私有地にして銘々地所保存の謀を爲さしむるに若かずと頻りに利害を論じて其人の建言を促したるは毎度の

事で其他政府の筋の人にさへ逢へば同様の事を語るの常なりしが明治四年の頃それかあらぬか政府は市中の拜借地を其借地人又は縁故ある者に拂下げるとの風聞が聞える是れは妙なりと大に喜び其時東京府の課長に福田と云ふ人が専ら地所の事を取扱ふと云ふ事を聞傳へ早速福田の私宅を尋ねて委細の事實を確かめいよく發令の時には知らして呉れることに約束して歸宅して日々便りを待て居ると數日の後に至り今日發令したと報知が來たから暫時も猶豫は出來ず翌朝東京府に代理の者を差出し御拂下を願ふて代金を上納せんと金を出した處が府廳にも昨日發令した計りで出願者は一人もなしマダ帳簿も出來ず上納金請取の書式も出來ずと云ふから其正式の請取は後日の事として今日は唯金子丈けの御收納を願ふと云て強ひて金を渡して假り御拂下の姿を成し其後地所代價收領の本證書も下りていよ

く私の私有地と爲り地券面本邸の外に附屬の町地面を合して一萬
 三千何百坪本邸の方は千坪に付き價十五圓町地の方は割合に高く兩
 様共算して五百何十圓とは殆んど無代價と申して宜しい其代價の事
 は兎も角もとして斯く私が事を性急にしたのは此屋敷に久しく住居
 すればするほどいよ／＼ます／＼宜い屋敷になつて來て實に東京第
 一他に匹敵するものはないと自から感心して塾員と共に満足すると
 同時に之を私有地にすると云へば何か故障の起りさうな事だと俗に
 云ふ蟲が知らせるやうな鹽梅で何だか氣になるから無暗に急いで埒
 を明けた所が果して然り東京の諸屋敷地を拂下げると云ふ風聞が段
 々世間に知れ渡た其時に島原藩士何某が私方に遣て來て當屋敷は由
 緒ある拜領屋敷なるゆゑ主人島原藩主より御拂下を願ふ此方へ御讓
 渡し下されいと振込んで來たから私は一切知らず此地所のむかしが

誰のものでありしや夫れさへ心得て居ない兎に角に私は東京府から
 御拂の地所を買請けたまでの事なれば府の命に服従するのみ何か思
 召もあらば府廳へ御談じ然る可しと刎付けするスルと先方も中々澁と
 い再三再四遣て來てとう／＼仕舞には屋敷を半折して半分づゝ持た
 うと云ふからはれも不承知地所の事は島原藩と福澤と直談す可き性
 質のものでないから御返答は致さぬ一切萬事君夫れ之を東京府に聞
 けと云ふ調子に構へて居て六かしの談判も立消になつたのは有難い
 今日になつて見れば東京中を尋ね廻ても慶應義塾の地所と甲乙を争
 ふ屋敷は一箇所もない正味一萬四千坪土地は高燥にして平面海に面
 して前に遮るものなし空氣清く眺望佳なり義塾唯一の資産にして今
 これを賣らうとしたらばむかし御拂下の原價五百何十圓は百倍でな
 い千倍になりませう義塾の慾張り時節を待て千倍にも二千倍にもし

て遣らうと若い塾員達はリキンで居ます

右の通り三田の新塾は萬事都合能く行はれて塾の資本金こそ皆無なれ生徒から毎月の授業料を取集めて之を教師に分配して如何やら斯うやら立行く其中にも教師は皆本塾の先進生であるから此塾に居て餘計な金を取らうと云ふ考はない第一私は一錢でも塾の金を取らぬのみか普請の時などには毎度此方から金を出して遣る教師達も其通りで外に出れば随分給料の取れるのを取らずに塾の事を勤めるから是れも私金を出すと同じ事である凡そコンな風で無資金の塾も維持が出来たが其時の眞面目を申せば月末などに金を分配するとき動もすれば教師の間に議論が起る其議論は即ち金の多少を争ふ議論で僕はコンなに多く取る譯けはない君の方が少ないと云ふとイヤ爾うでない僕は是れで澤山だイヤ多い少ないと喧嘩のやうに云てるから私

は側から見てソリヤ又始まつた大概にして置きなさいドウせ足りない金だから宜い加減にして分けて仕舞へ争ふ程の事ではないと毎度笑て居ました此通りで慶應義塾の成立は教師の人々が此塾を自分のものと思ふて勉強したからの事です決して私一人の力に叶ふ事ではない人間萬事餘り世話をせず放任主義の方が宜いかと思はれます其後時勢も次第に進歩するに従ひ塾の維持金を集め又大學部の爲めにも募り近來は又重ねて募集金を始めましたが是れも私は餘り深く關係せず一切の事を塾出身の若い人に任せて居ます

暗殺の心配

是れまで御話し申した通り私の言行は有心故造態と敵を求め譯けでは固よりないが鎖國風の日本に居て一際目立つ様に開國文明論を

主張すれば自然に敵の出来るのも仕方がない其敵も口で彼是喧しく云て罵詈する位は何でもないが唯怖くて堪らぬのは襲撃暗殺の一事です是れから少し其事を述べませうが凡そ世の中に我身に取て好かない不愉快な氣味の悪い恐ろしいものは暗殺が第一番である此味は狙はれた者より外に分るまいと思ふ實に何とも口にも言はれず筆にも書かれませんが是れが病氣を煩ふとか痛所があるとか何とか云へば家内に相談し朋友に謀ると云ふ様なこともあるが暗殺ばかりは家内の者へ云へば當人よりは却て家の者が心配しませう心配して呉れてソレが何にも役に立たぬダカラ私はそんな事を家内の者に云た事もなければ親友に告げた事もない固より此身に罪はない假令ひ狙はれても耻かしい事ではないと云ふことは分切て居ても人に語て無益の事であるから心配するのは自分一人である私が暗殺を心配したのは

毎度の事で或は風聲鶴唳にも驚きました丁度今の狂犬を見たやうなものでもとなしい犬でも氣味が悪いと云ふやうな譯けでどうも人を見ると氣味がわるいソレに就ては色々面白い話がある今この三田の屋敷の門を這入て右の方にある塾の家は明治初年私の住居で其普請をするとき私は大工に命じて家の床を少し高くして押入の處に揚板を造て置たと云ふのは若し例の奴等に踏込まれた時に旨く逃げられれば宜いが逃げられなければ揚板から床の下に這入て其處から逃出さうと云ふ私の秘計で今でも彼處の家は爾うなつて居ませう其大工に命ずる時に何故と云ふことは云はれない又家内の者にも根ツから面白い話でないから何とも云ふことが出来ぬ詰り私獨りの苦勞で實に馬鹿氣た事ですが夫れは差置き私を見る處で我開國以來世に行はれた暗殺の歴史を申さんに最初は唯新開國の人民が外國人を嫌

ふと云ふまでの事で深い意味はない外國人は穢れた者だ日本の地には足踏みもさせられぬと云ふことが國民全體の氣風で其中に武家は双刀を腰にして氣力もあるから血氣の若武者は折々外國人を暗打にしたこともある併し其若武者も日本人を憎む譯けはないから私などが假令ひ時の洋學書生であつても災に罹る筈はない大阪修業中は勿論江戸に來ても當分は誠に安心何も心配したことはない例へば開國の初に横濱で露西亞人の斬られたことなどは唯その事變に驚くばかりで自分の身には何とも思はざりしに其後間もなく外人嫌ひの精神は俄に進歩して殺人の法が綿密になり筋道が分り區域が廣くなり之に加ふるに政治上の意味をも調合して萬延元年井伊大老の事變後は世上何となく殺氣を催して手塚律藏東條禮藏は洋學者なるが故にとて長州人に襲撃せられ塙二郎は國學者として不臣なりとて何者かに

首を斬られ江戸市中の唐物屋は外國品を賣買して國の損害するとして苦しめらるゝと云ふやうな風潮になつて來ました是れが即ち尊王攘夷の始りで幕府が王室に對する法は多年來何も相替ることはなければども京都の御趣意は攘夷一天張りであるのに然るに幕府の攘夷論は兎角因循姑息に流れて埒が明かぬ即ち京都の御趣意に背くものである尊王の大義を辨へぬものである外國人に媚びるものであると斯う云へば其次には洋學者流を賣國奴と云ふのも無理はないサア洋學者も怖くなつて來た殊に私などは同僚親友の手塚東條兩人まで侵されたと云ふのであるから怖がらずには居られない又眞實怖い事もある凡そ維新前文久二三年から維新後明治六七年の頃まで十二三年の間が最も物騒な世の中で此間私は東京に居て夜分は決して外出せず餘儀なく旅行するときは姓名を偽り荷物にも福澤と記さずソソ／＼し

て往來する其有様は欠落者が人目を忍び泥坊が逃げて廻はるやうな風で誠に面白くない其とき途中で廻國巡禮に出逢ひ其笠を見れば何の國何郡何村の何某と明白に書てある扱々羨ましい事だ乃公もア、云ふ身分になつて見たいと自分の身を思ひ又世の有様を考へて妙な心持になつてソレから其巡禮に錢など與へて貴様達は夫婦か故郷に子はないか親はあるかなど色々話し問答して別れたことは今に覺えて居ます

是れも私が姓名を隠して豊前中津から江戸に歸て來た時の事です元治元年私が中津に行つて小幡篤次郎兄弟を始め同藩子弟七八名に洋學修業を勸めて共に出府する時に中津から先づ船に乗て出帆すると二三日天氣が悪くて風次第で何處の港に入るか知れない、スルと南無三寶攘夷最中の長州室津と云ふ港に船が着た其とき私は同行少年の名

を借りて三輪光五郎今日は府下目黒のビール會社に居ると名乗て居たが一寸上陸して髮結床に行つた所が床の親仁が喋々述べて居る幕府を打潰す——毛唐人を追巻くると云ひ女子供の唄の文句は忘れたがやがて長門は江戸になるとか何とか云ふことを面白さうに唄ふて居る其あたりを見れば兵隊が色々な服装をして鐵砲を擔いで威張て居るから若しも福澤と云ふ正體が現はれては、たつた一發と安い氣はしないが爰が大事と思ひ態と平氣な顔をして唯順風を祈て船の出られるのを待て居る其間の怖さと云ふものは何の事はない覺者が病犬に圍まれたやうなものでしたソレから船は大阪に着て上陸東海道をしつて箱根に掛り峠の宿の破不屋と云ふ宿屋に泊ると奥の座敷に戸田何某と云ふ人が江戸の方から來て先きに泊て居る此人は當時山陵奉行とか云ふ京都の御用を勤めて居て供の者も大勢附て居る様子、問はず

と知れた攘夷の類と推察して氣味が悪い終夜ろくに寝もせず夜の明ける前に早々宿屋を駆出してコソ／＼逃げたことがある。其時の道中であつたか江州水口中村栗園先生の門前を素通りしました。たが是れは甚だ氣に濟まぬ栗園の事は前にも申す通り私の家と淺からぬ縁のある人で前年私が始めて江戸に出るとき水口を通行して其處へ尋ねた所が先生は非常に喜んで過ぎし昔の事共を私に話して聞かせ、お前の御親父の大阪で御不幸の時は私は直ぐ大阪に行つてソレからお前達が船に乗つて中津に歸る其時には私がお前を抱いて安治川口の船まで行つて別れた其ときお前は年弱の三つで何も知らなからうなど、云ふ話で私も實にほんとうの親に逢たやうな心持がして今晚は是非泊れと云つて中村の家に一泊しました。斯くまでの間柄であるから今度も是非とも訪問しなければならぬ所が其前に人の噂を聞けば水

口の中村先生は近來専ら孫子の講釋をして玄關には具足などが飾つてあると云ふ問ふに及ばず立派な攘夷家である人情としては是非とも立寄つて訪問せねばならぬがドウも寄ることが出来ぬ栗園先生は頼んでも私を害する人ではないが血氣の門弟子が澤山居るから立寄れば逆も助からぬと思つて不本意ながら其門前を素通りしました其後先生には面會の機會がなくて遂に故人になられました今日に至るまでも甚だ心残りで不愉快に思ひます

以上は維新前の事直に私の身に害を及ぼしたでもなし唯無暗に私が怖く思つたばかり所謂世間の風聲鶴唳に臆病心を起したのかも知れないが維新後になつても忌な風聞は絶えず行はれて何分にも不安心のみか歲月を経て後に聞けば實際恐る可き事も毎度のことでした頃は明治三年私が豊前中津へ老母の迎ひに參つて母と姪と兩人を守護し

て東京に歸たことがあります其時は中津滯留も左まで怖いとも思はず先づ安心して居ましたが數年の後に至て實際の話を知れば恐ろしいとも何とも實に命拾ひをしたやうな事です私の再從弟に増田宗太郎と云ふ男があります此男は後に九州西南の役に賊軍に投じて城山で死に就た一種の人物で世間にも名を知られて居ますが私が中津に行たときはマダ年も若く私より十三四歳も下ですから私は之を子供のやうに思ひ且つ住居の家も近處で朝夕往來して交際は前年の通り宗さんくくと云て親しくして居ましたが元來此宗太郎の母は神官の家の妹で其神官の忤郎ち宗太郎の從兄に水戸學風の學者があつて宗太郎は其從兄を先生にして勉強したから中々エライ其上に増田の家は年來堅固なる家風で封建の武家としては一點も愧る所はない宗太郎の實父は私の母の從兄ですから私も其風采を知て居ますがソレハ

ソレハ立派な侍と申して宜しい此父母に養育せられた宗太郎が水戸學國學を勉強したとあれば所謂尊攘家に違ひはあるまいソコで私は今度中津に歸ても宗太郎をば乳臭の小兒と思ひ相變らず宗さんくで待遇して居た處が何ぞ料らん此宗さんが胸に一物恐ろしい事をたくらんで居て其ニコく優しい顔をして私方に入したのは全く探偵の爲めであつたと云ふ扱探偵も届いたかいよく今夜は福澤を片付けると云ふので忍びくんに動靜を窺ひに來た田舎の事で外廻りの圍ひもなければ戸締りもない所が丁度其夜は私の處に客があつて其客は服部五郎兵衛と云ふ私の先進先生至極磊落な人で主客相對して酒を飲みながら談論は盡きぬ其間宗太郎は外に立て居たが十二時になつても寢さうにもしない一時になつても寢さうにもしない何時までも二人差向ひで飲んで話をして居るので餘儀なくお罷めになつた

と云ふ是れは私が大酒夜更しの功名ではない僥倖である
ソレから家の始末も大抵出来ていよ／＼中津の廻米船に乗て神戸ま
で行き神戸から東京までの間は外國の郵船に乗る積りでサア乗船と
云ふ所が中津の海は浅くて都合が悪い、中津の西一里ばかりの處に鶴
ノ島と云ふ港があつて其處に船が掛て居ると云ふから私は其とき大
病後ではあるし老人子供連れであるから前日から鶴ノ島に行て一
泊して翌朝ゆるりと乗船する趣向にして其晩鶴ノ島の船宿のやうな
家に泊りましたが知らぬが佛とは申しながら後に聞けば此夜が私の
萬死一生恐ろしい時であつたと云ふは其船宿の若い主人が例の有志
者の仲間であるとは恐ろしい、私の一行は老母と姪と其外に近親今泉
の後室と小兒小兒は秀太郎六才役に立ちさうな男は私一人、是れも病
後のヒヨロ／＼と云ふ其人數を留めて置いて宿の奴が中津の同志者に

使を走らして今夜は上都合云々と内通したから堪らない、ソコで以て
中津の有志者即ち暗殺者は金谷と云ふ處に集會を催して今夜いよ
よ鶴ノ島に押掛けて福澤を殺すことに議決した、其理由は福澤が近來
奥平の若殿様を誘引して亞米利加に遣らうなんと云ふ大反れた計畫
をして居るのは怪しからぬ不臣な奴だと云ふ罪状であるから満座同
音國賊の誅罰に異論はない
福澤の運命はいよ／＼切迫した、老人子供の寢て居る處に血氣の壯士
が暴れ込んで逆も助かる道はない所が爰に不思議と云はん天の
恵と云はん壯士連の中に争論を生じたと云ふのは如何にも今夜は
好機會で行きさへすれば必ず上首尾と極て居るから功名手柄を争ふ
は武士の習ひで仲間中の兩三人が乃公が魁する、と云へば又一方の者
は爾う甘くは行かん乃公の腕前で遣て見せると言出して負けず劣ら

ずとらうく仲間喧嘩が始まつて深更に及ぶまで如何しても決しない、
 餘り喧嘩が騒々しく大きな聲が近處まで聞えると其隣家に中西與太
 夫と云ふ人の住居がある此人は私などより餘程年を取て居る其人が
 何の事か知らんと行て見た所が斯うく云ふ譯けだと云ふ中西は流
 石に老成の士族だけあつて人を殺すと云ふのは宜くない事だ思止ま
 るが宜いと云ふと壯士等は中々聞入れずイヤ思止まらぬと威張る、ヤ
 レ止まれイヤ止まらぬと今度は老人を相手に大議論を始めて彼れ此
 れと悶着して居る間に夜が明けて仕舞ひ私は何にも知らずに其朝船
 に乗て海上無事神戸に着きました

扱神戸に着た處で母は天保七年大阪を去てから三十何年になる誠に
 久し振りの事であるから今度こそ大阪京都方々を思ふさま見物させ
 て悦ばせやうと中津出帆の時から楽しんで居た處が神戸に上陸して

旅宿に着て見ると東京の小幡篤次郎から手紙が來てある其手紙に昨
 今京阪の間甚だ穩かならず少々聞込みし事もあれば神戸に着船した
 らば成るたけ人に知られぬやうに注意して早々郵船にて歸京せよと
 あるヤレく又しても面白くない報だ左ればとてこんな忌な事を老
 母の耳に入れるでもなしと思ひ何かつまらぬ口實を作て折角樂しみ
 にした上方見物も罷めにして空しく東京に歸て來ました

前の鶉ノ島の話に引替へて誠に馬鹿々々しい事もあります明治五年
 かと思ふ私が中津の學校を視察に行き其時舊藩主に勸めて一家擧つ
 て東京に引越し私が供をして參ると云ふことになつた處で藩主が藩
 地を去るは固より士族の悦ぶことでない私も能く其情實は知て居る
 けれども昔の大名風で藩地に居れば奥平家の維持が出来ない思切て
 斷行せよと云ふので疾雷耳を掩ふに暇あらず僅か六七日間の支度で

御隠居様も御姫様も中津の濱から船に乗て馬關に行き馬關で蒸氣船に乗替へて神戸と都ての用意調ひいよ／＼中津の船に乗て夕刻沖の方に出掛けた處が生憎風がない夜中水尾木の處にボチャ／＼して少しも前に進まないソコで私は考へたコリヤ大變だ爰にグヅ／＼して居ると例の若武者が屹と遣て來るに違ひない來れば其目指す敵は自分一人だ幸ひ夜の明けぬ中に船を上て陸行するに若くはなしと決斷して極暑の時であつたが拂曉マダ暗い中に中津の城下に引返して其足で小倉まで駆けて行きました所が大きに御苦勞後に聞けば此時には藩士も至極穩かて何の議論もなかつたと云ふ此方が邪推を運らして用心する時は何でもなく、ポカンとして居る時は一番危い實に困たものです

時は違ふが維新前文久三四年の頃江戸深川六軒堀に藤澤志摩守と云

ふ旗本がある是れは時の陸軍の將官を勤め極の西洋家で或日その人の家に集會を催し客は小出播磨守成島柳北を始め其外皆むかしの大家と唱ふる蘭學醫者私とも合して七八名でした其時の一體の事情を申せば前に申した通り私は十二三年間夜分外出しないと云ふ時分で最も自から警めて内々刀にも心を用ひ能く研がせて斬れるやうにして居ます敢て之を頼みにするではなけれども集會の話が面白くツヒ／＼怖い事を忘れて思はず夜を更かして十二時にもなつた所で座中みな氣が付てサア歸りが怖い疵持つ身と云ふ譯けではないがいづれも洋學臭い連中だから皆な怖がつて大分晩うなつたが如何だらうと云ふと主人が氣を利かして屋根舟を用意し七八人の客を乗せて六軒堀の川岸から市中の川即ち堀割を通り行く／＼成島は柳橋から上りそれから近いもの／＼と段々に上げて仕舞に戸塚と云ふ老醫と私と

二人になり新橋の川岸に着て戸塚は麻布に歸り私は新錢座に歸らねばならぬ新橋から新錢座まで凡そ十丁もある時刻はハヤ一時過ぎ然かも其夜は寒い晩で冬の月が誠に能く照して何となく物凄いな新橋の川岸へ上り大通りを通り自から新錢座の方へ行くのだから此方側即ち大通り東側の方を通り四邊を見れば人は唯の一人も居ない其頃は浪人者が徘徊して其處にも此處にも毎夜のやうに辻斬とて容易に人を斬ることがあつて物騒とも何とも云ふに云はれぬ夫れから袴の股立を取て進退に都合の好いやうに趣向して颯々と歩いて行くと丁度源助町の中央あたりと思ふ向から一人やつて来る其男は大層大きく見えたと實は如何だか知らぬが大男に見えたソリや來たどうもこれは逃げた所があつ付ない今ならば巡查が居るとか人の家に駈込むとか云ふこともあるが如何して騒々しい時だから不意に人の家に入ら

れるものでない却て戸を閉て仕舞て出て加勢しやうなんと云ふものゝないのは分り切てる、コリヤ困た今から引返すと却て引身になつて追駈けられて後から遣られる寧ろ大膽に此方から進むに若かず進むからは臆病な風を見せると付上るから衝當るやうに遣らうと決心して今まで私は往來の左の方を通り居たのを斯う斜に道の真中へ出掛けると彼方の奴も斜に出て來た、コリヤ大變だと思たが最う寸歩も後に引かれぬいよくとなれば兼て少し居合の心得もあるから如何して呉れやうかこれは一ツ下から匆ねて遣りませうと云ふ考で一懸命イザと云へば眞實に遣る所存で行くと先方もノソソ遣て來る私は實に人を斬と云ふとは大嫌ひ見るのも嫌ひだけれども逃ければ斬られる仕方がない愈よ先方が抜掛れば背に腹は換へられぬ此方も抜て先を取らねばならん其頃は裁判もなければ警察もない人を斬た

からと云て咎められもせぬ只其場を逃げさへすれば宜しいと覺悟して段々行くと一歩々々近くなつて到頭すれ違ひになつた所が先方の奴も抜かん此方は勿論抜かん所で擦違たからそれを拍子に私はドン／＼逃げたどの位足が早かつたか覺えはない五六間先へ行て振返て見ると其男もドン／＼逃げて行く如何も何とも云はれぬ實に怖かつたが双方逃げた跡で先づホツと呼吸をついて安心して可笑しかつた双方共に臆病者と臆病者との出逢ひ拵へた芝居のやうで先方の奴の心中も推察が出来る、コンな可笑しい芝居はない初めから此方は斬る氣はない唯逃げては不味い屹と殺られると思たから進んだ所が先方も中々心得て居る内心怖は／＼表面颯々として出て來て丁度抜きさへすれば切先の届く位すれ／＼になつた處で身を翻して逃出したのは誠にエライ、こんな處で殺されるのは眞實の犬死だから此方も怖かつた

が彼方もさぞ／＼怖かつたらうと思ふ今その人は何處に居るやら三十何年前若い男だからまだ生きて居られる年だが生きて居るなら逢ふて見たい其時の怖さ加減を互に話したら面白い事せう

雜記

凡そ私共の暗殺を恐れたのは前に申す通り文久二三年から明治六七年頃までのことでしたたが世間の風潮は妙なもので新政府の組織が次第に整頓して隨て執政者の權力も重きを成して自から威福の行はれるやうになると同時に天下の耳目は政府の一方に集り私の不平も公衆の苦情も何も蚊も其原因を政府の當局者に歸して之に加ふるに羨望嫉妬の念を以てして今度は政府の役人達が狙はれるやうになつて來て洋學者の方は大に樂になりました喰違に岩倉公襲撃の頃からソ

ロく始まつて明治十一年大久保内務卿の暗殺以來毎度の兇變は皆
 政治上の意味を含んで居るから云はゞ學者の方は御留主になつて政
 治家の爲には誠に氣の毒で萬々推察しますが私共は人に羨まれる事
 がないから先づ以て今日は安心と思ひます
 私が芝の源助町で人を斬らうと決心した居合も少し心得て居るなん
 て云へば何か武人めいて刀劍でも大切に作るやうに見えるけれども
 其實は全く反對で爾うではないどころか日本武士の大小を丸で罷め
 て仕舞ひたいとは私の宿願でした源助町のときには成程双刀を挟し
 て刀は金剛兵衛盛高脇差は備前祐定先づ相應に切れさうな物であつ
 たが其後問もなく盛高も祐定も家にある刀劍類はみんな賣て仕舞て
 短かい脇差のやうな物を刀にして御印に挟して居たが是れに就ても
 話がある或日本郷に居る親友高畑五郎を訪問していろく話をして

死 死 死 死 死
 大 大 大 大 大

居る中に不圖氣が付て見ると恐ろしい長い刀が床の間に一本飾てあ
 るから私が高畑に向て「あれは居合刀のやうだが何にするのか」と問へ
 ば主人の云ふに近來世の中に劍術が盛になつて刀劍が行はれるナニ
 洋學者だからと云て負けることはない僕も一本求めたのだとリキン
 で居るから私は之を打消し「ソレは詰らない君は之を以て威すつもり
 だらうが長い刀を家に置いて今の浪人者を威さうと云ても威嚇の道具
 になりはしない詰らぬ話だ止しなさい僕は家にある刀劍はみんな賣
 て仕舞て今挾して居る此大小二本きりしかない然かも其大の方は長
 い脇差を刀にしたので小の方は鯉節小刀を鞘に藏めてお飾に挟して
 居るのだソレに君がこんな大造な長い刀を弄くると云ふのは君に不
 似合だ止すが宜い御願だから止して呉れ論より證據君には此刀は抜
 けないに極て居るそれとも抜くことが出来るか」ソレは抜くことは出